

官軍徳川征伐等日々聞書雑録(上)

八ヶ岳総合博物館 古文書研究会

はじめに

八ヶ岳総合博物館 古文書研究会では、平成二十六年(二〇一四年)から、当館で収蔵している、古文書を解説してきた。

特に、茅野市の上原に葛井神社があるが、葛井神社の旧神主、九頭弁太夫矢島家に伝わる古文書を中心に取り扱ってきた。この成果を、『紀要No.24』『紀要No.25』『紀要No.26』に掲載した。

『紀要No.26』では、「年代日記諸雑録」という、慶応四年(明治元年 一八六八年)年の古記録を取り上げ、諏訪地域の幕末の様相を解説した。

本稿では、同じ慶応四年の諏訪の様相がわかる「官軍徳川征伐等日々聞書雑録」を取り上げ、「年代日記諸雑録」よりも、詳細な記録を取り上げ、幕末の諏訪の状況を見ていきたい。

《解題》

本稿では、「官軍徳川征伐等日々聞書雑録」(以下、「雑録」という表題にしたが、実際に表紙に書かれた表題は、「官軍徳川せいばつ 諸国鎮撫御勅使御警衛大名衆御人数 奥羽 會津等之任末方日々聞書雑録」と長いので短縮した。

本稿で取り上げる史料は、最期の九頭弁太夫である矢島信智(一八二九—一九〇六)が記した古記録である。

前半は「雑録」であるが、後半は「水戸屯集浪士和田峠之一戦之扣」であり、一冊の堅帳を全冊したものである。

「雑録」の内容は、慶応四年(一八六八年)一月に東山道鎮撫総督が下諏訪に進軍してきてから始まっている。慶応四年・明治元年の記事は年末までだが、その後は明治三年の記事となり、その後は安政七(一八六〇)年の「水戸前中納言之許略事也」という桜田門外の変と水戸藩主徳川斉昭について、明治四年五年の諏訪高島藩の廃止と筑摩県の成立の中での社会情勢の変化などを記録している。

本稿で取り上げる部分は、慶応四年一月から六月二十日までである。内容は、東山道鎮撫総督の進軍、甲府城の接収、東山道軍への高島藩兵の従軍、関東の情勢、五月四日から十八日まで断続的に起こった、洪水、越後・会津出兵など、新政府軍と旧幕府軍の戦いと自然災害、除伝について記している。

九頭弁太夫の住居は、甲州街道に近く、甲州街道を通過する軍勢の様子や、早蕨籠、早馬の回数などを克明に記しており、毎日、街道に出て見物していたようである。

閏四月二十六日に、「飯山御城下へ参り、御軍主掛も衆へ相尋、両角新右衛門と申仁、挨拶、右之様子承記、」とあり、実際に現地へ行って取材してきたことを窺わせる記述もあり、筆者の矢島信智の、並々ならぬ、社会情勢の変化に対する興味を看取される。

基本的には、時系列で記されているが、同じ事が重複して書かれていたり、日にちが戻っている箇所がある。伝聞による所があり、日にちが実際とは異なる部分があったり、現在の情報と照らし合わせてみると、

事実と異なっていたり、存在しない事件が記されていることがある。また、事実かどうかわからないが、詳細な出来事が書かれていることもあるので、今後も検証していかねばならない部分が多い。

「年代日記諸雑録」と重なる記述も多いが、戦闘と洪水については、「雑録」の方が詳しい。

●例言・判例

●本稿は、八ヶ岳総合博物館 古文書研究会で、会員が崩し字から字起ししたものを掲載している。また、月一回、会員がそれぞれ調べたことを基にして柳川が補足を加えた。解説をあわせて掲載する。

●積文の右方にある番号は、「雑録」の見開きページの番号である。

●各項目番号を、各項目冒頭下に(一)というように、括弧の漢数字で示している。

●年月日はすべて旧暦である。

古文書研究会会員名簿

伊藤 博夫 岩波 吉春 片山 庄次 小平 正八 田中 生浦 田中 巖
 茅野 信一 原 寿樹 平林 太尾 細田 岩信 宮坂 嘉幸 山田 昇
 柳川 英司(茅野市八ヶ岳総合博物館)

平成三年度 古文書研究会の活動

・解説史料
 安政七年「諸日記帳」(高部 藤森知美家文書)
 慶応四年「諸日記帳」(高部 藤森知美家文書)

活動日	発表者	参加人数
四月十五日	茅野信一 原 寿樹	9
五月二十日	小平正八 田中 巖	7
六月十七日	柳川英司 山田 昇	9
七月二十九日	宮坂嘉幸 細田岩信	8
八月十九日	岩波吉春 茅野信一	8
九月二十日	小平正八 原 寿樹	9
十月二十一日	田中 巖 田中生浦	9
十一月十八日	柳川英司 山田 昇	9
十一月十六日	宮坂嘉幸 柳川英司	9
一月二十日	岩波吉春 茅野信一	9
一月十七日	小平正八 原 寿樹	8
三月十七日	田中 巖 田中生浦	9

《秘文》

1 (表紙)

「慶応四戊辰年一月日

官軍徳川せいばつ諸国鎮撫

御勅使御警衛大名衆御人数

羽、會津等之、仕末方、日々聞書雄録

庭敵大名會酒井、上杉、仙臺石候

征伐制札

騷動、敵柄頭責

勝負、無為方、勢兵

2

信智

君がため 国のためとて すつるなら

おしまさりしは 我命奉

寒時覚

寒の入前大い寒し、寒成て暖になり、又五六日大寒し、中成又暖

成、雨降、大雪一度降、寒中又雪降から暖候、春雪如く

一、鎮撫勅使岩倉殿、辰三月五日下之スワ御着、相成候、大将岩倉殿は

御兄弟、御二頭御兄様、岩倉二位、御弟ハ、八千代丸殿、申よし、御人数は

第一番、美濃之大垣、田采女正殿、御藩千八百七人、薩州鹿兒島藩

八百八拾六人、土佐国高知城主松平土佐守殿、御藩千五百人、右何も唐人之

躰で、せいよふ鉄炮一挺ツゝ持参、又ハ髪甲、半人数着、御座候、半分ハ

にら山笠著、御座候、長前国毛利大膳大夫殿御藩、御本陣附人数四百人

余のよし、是は銘々手鎗持参、義経袴、陣羽織、而、岩倉殿前後を

相かためそう、遠江国城主井伊掃部頭殿御藩八百人余、勢効高須松平

撰津守殿三万石御藩百余人、西大路殿御人数同百余人、御本陣岩倉殿御人数式百

人、右之分ハ、中山道鎮撫使御人数、御座候

一、東海道鎮撫使は、柳原殿、橋本少将殿、軍将有栖川師宮様、

先陣は、サ州、武藩は尾州御人数、小田原人数、沼津人数、筑州人数、長州人数、

其外人数不知数候、江戸口高松輪、品川、先陣勢、サ州、長州固々居るよし、

一、北陸道勅使は、正親町二条前大納言殿、中山大納言殿、大名衆御警衛

御座候御人数之處ハ不知候、江戸口は、千しゆ宿、先陣居るよし、

一、中山道勅使ハ岩倉待従、下之スワ御人数、別而甲州道は先陣、土州、因州にて〇

右二道、官軍人数、五拾五人程之よし、〇御本陣大将和田豊前知行二万五千

右勅使名代よし、スワよりハ城主藩四拾人、先陣遠人数八十人、上、断断上スワ

3

より、甲府道御まかな方云付られ、右両城主役て行、甲府城のり取節は、當

藩、柳町口御門より、大将千野新左衛門、塘飛越、堀越、門押開、城内、押

入よし、引続て因、土押破り入よし、なんなく城受取、城番は、松代様

下スワ泊り通る鳥木宿ハ、

御人数四百、五日通、五百、甲府城番被云付、人数十人余云、大砲数挺、小砲ハ

数千挺持参、御座候、御臺所荷物、或ハ諸道具長持不知数候、

一、岩倉殿様、三月一日下諏訪御泊り、二日御出立和田宿御泊りよし、因、土、高

遠、川越、大和様ハ、上スワ城下、湯之脇赤羽根御泊り、相成候、同日、

土州御人数、二四拾人計當村御通、大将ハ甲着、羅紗之着以て通る、並、老人

士、烏帽子をかむり、白き箱せおい、跡は残らずにら山笠につっぽうにたんぶ

くろ、杓をはき、せいよう鉄砲老挺ツゝ持参て通候、右甲刃道中

繰出し始候、昼後又土州一隊、老隊八拾人ツゝ、大砲式丁玉薬箱、長

持等多し、右何も人足、御用人のよし、不残合印は向かたに

白き立筋老筋ツゝ、髪甲又は立烏帽子、にら山笠芝類て候、

上之スワより、葛木宿泊り、引續ては打四度計、通、猶又續て

士、隊、何も唐人仕度て、鉄砲持参候、且又一隊之矢將は老人ツゝ、是ハ

鎗持参、隊印のはたハ、薄赤き色、白字、壹番、士、番追番付

一隊ハ、大砲玉薬前、同断

一、三日、九ツ半頃、因州御人数前、同一隊り拾番追、甲州道中惣大

將、御家老式人、老人は、和田豊前云し人のよし、何も向人三千位之

人也、馬上て通、御同勢十四五人也、のり馬五疋、馬印老本薄桃

色、白横筋、荷物、大はん御圍人のよし、

一、七ツ頃より、和田峠へ越し行、人数三四百人程鳥木宿泊り、通、是ハ金

沢宿よりはや馬て行、和田の勢引返来、當日はや打は馬共八度

行来、御座候、大砲五挺玉薬前、同し、

4

一、四日朝六ツ半頃、又十万人人数式百人程、大砲式挺玉薬前、同し、早打

加籠式挺通、跡より真田御人数四、五百人隊印有銘々手鎗、せいよう

小筒持参、大砲ハ車附五挺、大砲、短筒、挺玉薬前同し、大将は馬上、

馬印ハ海茶色、六文銭紋附、松代合目印ハ、細市松多り、右も陣

羽織御座候、道真持人足ハ御用人也、土分計八百人余、歩兵歩人共、千式

(5)

(6)

(7)

(8)

(9)

百人之下よし、右何も鳥木宿泊、四ツ半頃より飛脚四度通。何も
甲州の方へ通也。

一、右同日開書、甲府而、先達、高松御入来々節同様、甲府長善寺前
寛代、手代、同心召連、山口之関守共同々にて、土州御人数、鳥木宿泊
居候處、御本陣へ申出、此度御通行之よし、御座候得共、人馬継立又
ハ、休泊等之義も不仕候申出之よし、右付、土州より申付られ、
スワ御人数、而召取、致し、今日迄綱付、而鳥木宿、罷有よし、又同

宿、而使者、以、甲府城代、懸合、相成候、又申出之趣ハ、もの共申立之通
宣敷、猶又休泊之義、支つかい候ハ、葦崎、臺ヶ原焼拂ひ、野陣
而罷通と之よし、右申立候は、甲府勢、臺ヶ原へ陣場見立、成候よし、
然共、是も大軍、おぞれ申立已、而、甲府へ引返、城内明渡し、成よし、
旗本共、引拂、成、それより、甲府へ乱入無難、高嶋先陣、而
甲陽城棄取、宣軍御人数、諸藩より甲府へ勿論、石和、栗原迄
御泊、成候よし、
相楽

一、三日下スワより追立候浪人、樋橋旅宿、大将は、佐柄総二、人数都合
八拾人程之よし、内大将分八人、雑兵共、前之通天炮五挺、玉粟共、小筒
百挺程、鎗も多分之よし、馬式足、此人数岩倉殿より、御召捕、相成、訳
後、印、サ州、因州、スワ三手、而樋橋参り、総三掛合候處、前々
頼之通、岩倉御殿先陣頼人よし、而降参之よし故、御本陣

5

へ下り、右之段之申談し、本陣を、飛脚、以、総三御殿御目見へ、相成候
よし申越、御召取、成候よし、引續て大将分八人召取、雑兵も段々召
寄、五六拾人召取、相成候よし、残之分欠落、相成候よし、せんき致し、
弥以、不整罪、相成、死罪、相定、三日夜雪降夜、下之スワ立町迎、
友之町重右衛門持地表畑、おいて打首、右大将八人也、雑兵共ハせんき義
之上、追拂ひ、相成、外、土老人、頭半つりいたし、甲州口、拂追、相成候、又
追拂之分ハ、小遣ひ金、老兩位ツ、被下候よし、右之金子は、佐柄総
三持参金五百両程有之候よし、右之金子、御手黄金、成候、由御座候、
残金之分ハ、髪結又は町離共、追下候よし、右八人首并置場
所、三日之間、さらし置片付、相成候、又追拂人数之内、當国之物
三人有之よし、老人は、金沢宿金蔵、云もの也、老人高木村之足輕之
よし、老人は下スワ之もの成よし、
弥御しらべ相定、土州御藩以上六人、小もの外、掛役人中、早加籠

にて、先勢へ追付よし、四日昼後通、因州、土州同断、又五日早

(10)

加籠三度通。

一、下諏訪御泊、御本陣岩倉殿御兄弟御兄様十八才御弟十五才之
のよし、御、万様錦の御しようそく、立島帽子虎皮さや之
太刀御馬上、而御通行、御座候、御近習方ハ長州勢、先陣ハ美濃之大
垣、是は若殿御出之よし、御先騎、御座候、外、御敬衛衆は尾州、因
州、土州、肥後熊本勢、柳川勢、當国、而は松代、上田、小諸、岩村田、須坂
松本勢、飯田勢、甲州道中へ、諏訪、高遠、座光寺、山吹人数也、且又
下スワ御留り、中御入用之儀ハ、松本にて御拂被成候よし、甲州道中御人数
御賄かなひ之儀ハ、上スワより甲府迄、スワ、高遠、而致、甲府、而新宿迄
甲府代官致、よし、新宿より江戶御逗留中は、スワ、高遠、而御賄ひ
方之よし、

一、スワにて御本陣、献上もの騎馬老疋、大砲老疋玉粟共、土州、同疋疋
甲州道中先陣スワ、高遠二隊ツ、スワ勢一隊、大将は、千野

(11)

新左衛門、同立木与兵衛様、小沢氏家中四拾人、歩人共、百余人、外、御まか
なひ方人数有之、當上原村、而は八人、房八、竹次郎、精七、屋吉、猪右衛門
新助、勇治、兼蔵、まし人房次郎、猪吉、次三郎、江戶追送、返り候ものも
有、又は四月廿三日迄、不帰候ものも多分御座候
一、又、松本様御預り知行所五万八千石、此度御引上、相成、尾州、御預ケニ
成候、尾州より被参、分札立替、文語書方、天廷御領尾州御預り所
有之よし、
三

一、當郡大殿様、江戶御出立、四月四日、此度ハ江戶御屋鋪之義ハ、不殘御引
拂、御成候、御荷物御長持等、何程共数不知、甲州道中、又、中山道毎日、
御送り被成候、

一、徳川慶喜殿義ハ、上野御宮へかけ込、僧、相成候よし、風聞、御座候、
上野之御宮様、御自身徳川氏之御わび、東海道、御登、被成候よし、
相州小田原城に、有春川之御宮様、將軍、て、御下御留り、

上野御宮様御本陣へ行、御わひ申、弥以言相定成り、慶喜殿義ハ、水戸
御預ケ、江戶城之儀ハ、紀州殿へ御預ケ之由候、
一、六日朝四ツ頃迄、因州荷物大分通、大砲五六挺、玉粟共、大砲方士付添
甲府へ行、當日、追鎮撫使人数、甲府、御留り、之よし、早加籠三度
行、江戶方老度来、是ハ當城之はや也、昨日、もはや来、江戶より
他所飛脚ハ、甲府方へ何度も通。

一、二日より六日迄雨降、雪降、毎日も、又、は大風吹、夏も有、
七日、早加籠、早馬共、五六度往来候、晚六ツ頃、殿様御着付、甲州石

(17)

(18)

和先、勝めま宿之先而、関東勢官軍二戦付、殿様御道中故御地として、御家老千野源一郎始々、寛坂太、矢崎七郎右衛人は、劍術師範御用人、若者共式拾人、早加籠で殿様御出被成候處迄、飛付候と申參候。

7 一、七日一戦は官兵先陣、諏訪勢、大将は千野新左衛門、物勢四拾人、因州勢、土州勢、物勢三千余、関東勢は、籾本、或ハ会津藩、歩兵等様子也、物勢式三百人之下し、

両方共合戦相成、炮戦致し、終、官軍切込、関東勢散軍いたし、即死多し、官軍は、即死もの、土州老人、手負老人、因州は、手負式人之よし、関東勢生捕

三人甲府而、打首相成、其上、首さらすよし、殿軍散取、道員取、道具六、砲火、小旗十、番目定、其外は整頓す、甲府城之儀は、無難乗取、松代城主真田信濃守殿、御預ケ相成候、甲府追手先、

高札文、賞分之処、スワ、因、土而御預り書候よし、真田御城番人数、雑兵共、式千人程之由、大炮十挺計、小鉄砲ハ銘々候。

一、當城主天殿、江戸御引取之道中、鳥沢泊り參候処へ、関東散軍參り、殿様打取らんと申合、御本陣切込始候よし故、殿様、直、醫者加籠乗、夜、引返し、高井戸御用人源助申もの方、廻流被成、関東勢も、行方不知

相成候故、十三日御立、十九日高嶋御着相成候、ワカラツ、殿御道中故、不別、一節は、殿様、関東勢追立られ、即死等八九人も有之、

御家老千野孫九郎殿手負相成候と申觸、国中かたつを吞て、神社參詣、万民致し候得共、せつ已而、無難御帰城相成候。

一、十日、甲刃方、早打加籠二度来、甲州方、四度行、一度ハ夜、成通、昼七ツ頃より雨降出し、夕暮、成大雪替。

一、十一日、早朝はや打かこ、式度甲州方へ行、昼頃、夕方三度、右方行、一度ハ土州之下し、

一、廿日、御姫様、貞照院様、まき姫局、御帰被成候、

一、廿二日、御手掛、奥女中方御帰城相成候、江戸屋鋪は不殘御引拂相成候、勤番衆定居士、荷物、又は殿様御荷物、長持、たんず、駄荷等不數、殿様、御長計、百四五種之様子候、日々河海道通行高嶋へ留ル、

一、廿三日、承候処、東中甲北北海道、鎮撫御勅使、御人数東海道ハ、品川州崎、前順よし、甲州口ハ、新宿四ツ谷、長州御上屋鋪居よし、中山道ハ板橋邊、跡順よし、北陸道ハ千住、跡順す、

一、江戸御城之儀は、懸云相消、四月十日御受取相成候、岩倉殿御人数受取役人參、

岩倉殿十日、御乗込被成候、直御引取、板橋御本陣御城之儀は、長州御藩御預り被成候、承候處、諸道真等は、今迄之儀本衆役懸之銘相詰、城を渡し、道真ハ持參

8 一、江戸御城之儀は、懸云相消、四月十日御受取相成候、岩倉殿御人数受取役人參、 (27)

之よし、備京和昌様、同外天照院様、御老人御名前不知、

右之御方、局ハ清水御殿、田安御殿へ、御越被成候、一ツ橋慶喜殿儀、水戸御預ケ成候、是ハ、籾本少々附添、水戸預よし、跡、日光へ官軍三千人余、奥州口押よしして

十一日立出之よし、上野御宮様も日光御座被成候よし、是又不首尾之様子御座候、追々御藏知行之はた本衆も、御本陣へ頼出、御隨身成候ものへは、御旗被下よし、

一、爰に、岩倉殿御下之節、倉ヶ野宿御着之時、熊谷土手邊、安部撰津守殿御領分地之内、浪人申立集、勢居諸人、(苦しめ)、金銀、うばい取、又ハ、式方式千五百五十石、安部様来、兵糧或軍用金、或道具押かりにして乱法之よし、

其勢式三百人之よし、此よし、安部を頼出、岩倉之手勢、美濃大垣勢夜打、而五六拾人も打取、其外勢軍生捕人数、多分七十人程打首之よし、

一、又岩倉殿御通行前之事は、白井峠は、桃井常五郎ト云わるもの、手下者ヲ連れ、百四五十人、官軍先陣ト云立、白井峠陣取、往来之ものヲなませ、

大名は、小諸城主牧野遠江守老万五千石、岩村田城主、内藤景後守、二万五千石、右之大名ヲ偽、武道具等押かり、或ハ兵糧等追うバひ取、乱法致候よし、是ハ、小諸家中召取致候よし、桃井常五郎ハ百姓取られ候よし御座候、

一、北陸道鎮撫使御人数、當廿日頃、越後国高田邊、信州路善光寺道へ御通行相成、廿一日晩、上田御城下御泊之様子候、追分へ出て、中山道出よし、

於京都唐人參裏第一番、(南)ふらんす国、(アメリカ)あめりか、(イギリス)いきりす、(オランダ)あらんだ、(南)なんさん、(韓)だつ多ん国、以上六ヶ国也、第一番ふらんす人參たい、

帰り途中、勅廷百姓十五人、打て出、唐人七人即死之由、御座候、右十五人切腹之処、京都御廻り方參、差留切腹不為致、

左之式人、哥をよミ、(番)第一ばん、(番)切死、

咲掛て散るや大和の桜花よしや浮世に名はたゞづとも、

植村 林藤太郎
行年廿五才

国之ためする命はおしまじ君の行末思ひやられて、

十津川村 林田勝太郎
行年廿七才

當国城主諏訪因幡守家来醫師大山玄順云、人、是又知仁勇之もの成、

よつて、右乱国成事をはやくと居て、前々々様以の様子承り殿様へ京付之事、はやく存寄、書差上候得共、殿は御返答も無之よつて、首尾悪しく、

半年計も宿元相暮し居候處へ、弥以徳川慶喜、廷敵成、諸国鎮撫、関東せいはつ勅使御發向之御触廻りやいなや、大山氏、倉倉老人召連、兩人而二月上旬出本いたし、京都官敷處へ入込、国之ため、主人之為頼度心願之様子御座候、

(32)

吞舟之魚不被遊遊 壽桂 大山玄順

信濃には軍に勝を武士ハなし田作計だしにして居る

○慶応四年辰正月改

○総裁有栖川師宮 副総裁轉法輪二条前大納言昌倉前中將殿

○内国事務物督 正親町三条前大納言 徳大寺中納言殿

○儀定 山階宮 仁和寺宮 聖護院宮 中山前大納言 中御門中納言

知恩院宮 長谷三位 尾張前大納言 越前宰相殿 薩摩少將殿

○參與役掛

久我中納言 万里小路石大辨 西園寺三位中将 正親町少將 橋本少將

東久世前少將 鳥丸侍從 壬生修理大夫 四条前侍從 尾州藩三人

越前藩四人 薩州藩三人 土州藩三人 長州藩三人 柳川藩三人

○參與助役

徳波三位殿 五条少納言 長谷美濃權助 西田江太夫 柳原侍從

坊舎侍從 御筑地六門九門御警衛 日御門 清和院御門

公御門 朔平門 下立賣御門 蛤御門 乾御門 中立賣御門 今出川御門

右塞師御門 寺町御門 右之御門番大名替々く相勤よし、

青山左京大夫 龜井隱岐守 加藤遠江守

京都御取締役 松平凶畫頭 京都御見廻り役 加勢役

前田宰相 嶋津修理大夫 毛利大膳大夫 山内十左守 中川修理大夫

京都御火消役 永井日向守 御作事方 中井主水 衆中大名二十六人

外二加役

10 一、前^(一)も出し置通、下之スワ^(二)留流之浪士佐柄総三組八拾人計、岩倉殿御發向^(三)付、

下之スワ出立、二月廿七日種橋泊、下之スワ^(四)留流、日教廿一日有之よし、當城主^(五)

於ても度々金子又は馬、或ハ鯉鱒色々献上よし、^(六)茲野井殿先陣とハ不知、全く岩

倉殿先陣、承知致し、大せつ^(七)致し置候よし、後に偽^(八)あらわれ知る事也、

一、岩倉殿先陣、大垣勢廿七日晚、下スワ泊、右御人數五六ヶ宿^(九)御泊り^(十)成候

よし御座候、

一、爰に一ツ之乱發^(一)候、越後国栗田之城へ、会津浪人之五千入程、^(二)狂敵^(三)云籠押立

真寄来^(四)よし承^(五)段、終溝口向參之よし、高田城主も同じ事之様子候、柴田先陣

信州路へ来、風聞也、先觸松本迄来、右付、真田様甲府御城預り之段、^(六)国元、右

様之敵兵来、先觸故、岩倉殿より御城番御免^(七)相成候、四月廿四日甲府詰、^(八)藩晝夜

不限、廿六日迄立拂ひ、^(九)国元堅^(十)候よし、當城主へも御頼^(十一)相成、御人差出し侍五千人計

(33)

松代へ加勢、大砲考挺、小筒銘々よし、歩人三四拾人之様子御座候、右人數廿日立、

一、當城主、若殿、京都方御尋^(一)付、廿四日立之処右之様子故、病氣願仕立日延^(二)相成居

候、何れ片付次第出立様子御座候、

一、若殿義、弥以右之会津浪人追拂^(三)相成候故、閏四月三日立^(四)而、京都へ参^(五)たいす、

又会津浪人之義は、越後国を仕舞、^(六)信州へ来、飯山泊、右は越後高田方

飯山^(七)泊候、晚真田繰出し、よく日飯山出立之処へ、^(八)真田勢ひ押寄、^(九)挾

打^(十)致し、終^(十一)追^(十二)ちらし^(十三)三国峠^(十四)の方へ、^(十五)けて行候よし向々を追掛ケ行

候よし、スワ勢ひハ越後之方へ跡追ひ^(十六)行しよし、閏四月六日未、返^(十七)りも

無^(十八)之候、

一、又、官兵、^(十九)江戸方四月一日立^(二十)而、彦根勢、^(二十一)サ州勢、^(二十二)美濃国大垣勢、^(二十三)都合

三千人余、^(二十四)うつの宮^(二十五)追来候処、^(二十六)会津勢^(二十七)うつ宮^(二十八)引籠^(二十九)居、^(三十)一戦^(三十一)

及^(三十二)ひ候よし、四月十八日、終^(三十三)会津勢^(三十四)は^(三十五)軍^(三十六)相成、^(三十七)散乱^(三十八)之よし、^(三十九)勝^(四十)

のつて、官兵^(四十一)うつの宮^(四十二)の城^(四十三)を乗取、^(四十四)サ州勢^(四十五)城内^(四十六)入候処、^(四十七)夜^(四十八)

入、^(四十九)せめ寄来、^(五十)八方^(五十一)城下^(五十二)へ火^(五十三)を掛、^(五十四)焼打^(五十五)と被致候よし故、^(五十六)官

軍、^(五十七)右三千人余^(五十八)のもの^(五十九)あらかた^(六十)即死、^(六十一)手負^(六十二)相成候よし、^(六十三)それ方、

江戸^(六十四)飛脚^(六十五)到来、^(六十六)一之手^(六十七)は^(六十八)岩倉御人數、^(六十九)因州、^(七十)土州、^(七十一)尾州勢

続^(七十二)て、^(七十三)諸家^(七十四)追々^(七十五)出立、^(七十六)会津せめ^(七十七)之よし、^(七十八)大垣勢^(七十九)は手負

之もの多分^(八十)国本^(八十一)へ帰^(八十二)候哉、^(八十三)下之スワ通^(八十四)候よし、^(八十五)廿八日^(八十六)承^(八十七)り候、

一、閏四月三日、尾羽様より早打加籠^(一)而遠^(二)様へ来、^(三)杖突^(四)味^(五)下^(六)り上^(七)在、^(八)参詣し、

札守を貫、^(九)高鳴^(十)へ着、^(十一)續^(十二)て、^(十三)信州大名^(十四)不^(十五)殘^(十六)廻^(十七)よし、^(十八)はや^(十九)打^(二十)之藩^(二十一)申候よし、

附^(二十二)同四月七日^(二十三)承^(二十四)、^(二十五)京都^(二十六)より^(二十七)守屋^(二十八)内殿、^(二十九)土橋^(三十)祝^(三十一)主^(三十二)との^(三十三)書面^(三十四)之趣^(三十五)は、^(三十六)大山玄順

飯田^(三十七)森^(三十八)鬼^(三十九)との^(四十)之義^(四十一)は、^(四十二)先達^(四十三)而^(四十四)御下^(四十五)向^(四十六)之高^(四十七)松^(四十八)皇^(四十九)太后^(五十)后^(五十一)局^(五十二)少^(五十三)臣^(五十四)殿^(五十五)御館^(五十六)入^(五十七)込^(五十八)居^(五十九)候よし、

傳聞^(六十)御座候、

一、此度、^(六十一)京都^(六十二)より^(六十三)承^(六十四)り、^(六十五)勅命^(六十六)神^(六十七)祇^(六十八)官^(六十九)より^(七十)御勅^(七十一)使^(七十二)御下^(七十三)向^(七十四)相成候よし、^(七十五)京都^(七十六)より^(七十七)早打^(七十八)而、^(七十九)土

橋^(八十)常^(八十一)治^(八十二)郎^(八十三)参^(八十四)り^(八十五)様子^(八十六)は、^(八十七)宮御見^(八十八)分^(八十九)破^(九十)成候よし^(九十一)付、^(九十二)閏四月十日^(九十三)頃^(九十四)御着^(九十五)之用意、^(九十六)宮

奉行^(九十七)より^(九十八)沙汰^(九十九)有^(一百)之様子、^(一百一)手傳^(一百二)ひ^(一百三)廿七日^(一百四)拙者、^(一百五)左^(一百六)司^(一百七)郎、^(一百八)文^(一百九)吾^(一百十)三人、^(一百十一)宮へ^(一百十二)出^(一百十三)申候、^(一百十四)且^(一百十五)又^(一百十六)六日

夜^(一百十七)明^(一百十八)方、^(一百十九)上^(一百二十)金子^(一百二十一)村^(一百二十二)取^(一百二十三)附^(一百二十四)之見^(一百二十五)せ^(一百二十六)まん^(一百二十七)ち^(一百二十八)う^(一百二十九)や^(一百三十)焼、^(一百三十一)隣^(一百三十二)の市^(一百三十三)三^(一百三十四)郎^(一百三十五)火^(一百三十六)本^(一百三十七)軒^(一百三十八)焼^(一百三十九)失^(一百四十)相成候、

七日^(一百四十一)夜^(一百四十二)五^(一百四十三)ツ^(一百四十四)頃、^(一百四十五)早^(一百四十六)打^(一百四十七)加^(一百四十八)籠^(一百四十九)江^(一百五十)戸^(一百五十一)之^(一百五十二)方^(一百五十三)より^(一百五十四)来、^(一百五十五)人^(一百五十六)足^(一百五十七)承^(一百五十八)り^(一百五十九)処、^(一百六十)因州^(一百六十一)様^(一百六十二)御^(一百六十三)は^(一百六十四)や^(一百六十五)と^(一百六十六)申候、^(一百六十七)乘

加^(一百六十八)籠^(一百六十九)考^(一百七十)挺、^(一百七十一)宿^(一百七十二)加^(一百七十三)籠^(一百七十四)式^(一百七十五)挺^(一百七十六)通^(一百七十七)申候^(一百七十八)○又^(一百七十九)承^(一百八十)り^(一百八十一)候^(一百八十二)は^(一百八十三)、^(一百八十四)テ^(一百八十五)繰^(一百八十六)出し、^(一百八十七)因^(一百八十八)、^(一百八十九)土^(一百九十)、^(一百九十一)尾^(一百九十二)、^(一百九十三)又^(一百九十四)候^(一百九十五)空^(一百九十六)干^(一百九十七)つ

之^(一百九十八)宮^(一百九十九)道^(二百)中^(二百一)で、^(二百二)途^(二百三)中^(二百四)より^(二百五)為^(二百六)浪^(二百七)人^(二百八)もの^(二百九)と^(三百)打出、^(三百一)一^(三百二)戦^(三百三)有^(三百四)之^(三百五)よし、^(三百六)○右^(三百七)之^(三百八)沙^(三百九)汰^(四百)故^(四百一)當^(四百二)城^(四百三)主^(四百四)

於^(四百五)ても、^(四百六)奥^(四百七)州^(四百八)口^(四百九)口^(五百)へ^(五百一)聞^(五百二)當^(五百三)遣^(五百四)、^(五百五)小^(五百六)口^(五百七)七^(五百八)兵^(五百九)衛^(六百)申^(六百一)者、^(六百二)江^(六百三)戸^(六百四)より^(六百五)町^(六百六)人^(六百七)と^(六百八)相^(六百九)成^(七百)行^(七百一)候^(七百二)よし^(七百三)御^(七百四)座^(七百五)候

上^(七百六)り、^(七百七)高^(七百八)田^(七百九)在^(八百)荒^(八百一)井^(八百二)宿^(八百三)申^(八百四)処^(八百五)集^(八百六)、^(八百七)人^(八百八)數^(八百九)六^(九百)百^(九百一)人^(九百二)程、^(九百三)飯^(九百四)山^(九百五)より^(九百六)三^(九百七)里^(九百八)程^(九百九)有^(一千)取、^(一千一)富

倉^(一千一)峠^(一千二)と^(一千三)申^(一千四)処、^(一千五)飯^(一千六)山^(一千七)人^(一千八)數^(一千九)繰^(二千)出し^(二千一)候^(二千二)處、^(二千三)高^(二千四)田^(二千五)公^(二千六)方^(二千七)御^(二千八)返^(二千九)し^(三千)相^(三千一)成^(三千二)候、^(三千三)何^(三千四)れ^(三千五)子^(三千六)細^(三千七)も^(三千八)有^(三千九)之

哉^(三千十)存、^(三千十一)人^(三千十二)數^(三千十三)御^(三千十四)引^(三千十五)揚^(三千十六)相^(三千十七)成^(三千十八)り、^(三千十九)浪^(三千二十)士^(三千二十一)之^(三千二十二)云^(三千二十三)は^(三千二十四)等^(三千二十五)ハ、^(三千二十六)会^(三千二十七)津^(三千二十八)藩^(三千二十九)相^(三千三十)見^(三千三十一)候^(三千三十二)中^(三千三十三)は、^(三千三十四)関^(三千三十五)東^(三千三十六)歩^(三千三十七)兵

(36)

(37)

(38)

(39)

(40)

(41)

有之よし、同廿二日、浪士頭分内田庄藏、古屋作左衛門と申ものゝ内、作左衛門ハ荒井宿、人数三百人程、引返し候。同廿五日、残兵式百人程、飯山御城追手、練込、朝五ツ頃砲發及ひ、浪士散乱、御城下入口、安田之渡し場西、浪士陣取、東へは松代人、尾州砲隊、近砲發いたし、浪士敗軍、尾、松、勢、船、越し、追打致し候節、浪士逃去ながら放火、御城下ハ九分焼、御家中六七分焼、御城別業なし、浪士即死、式人手負へ多分御座候、浪士飯山而生捕、老人翌廿六日、松代様而式人、飯山御城下、而召捕、飯山御引渡、被成候、同日、越後荒井宿追々人数引揚、飯山三百五十人程、又飯山練込散乱付、山へ逃込候。

一、松代様、廿六日朝御出馬、御城下より三里程、先綿打村と申所御陣所成、

一、私儀、廿六日朝、飯山、参、様子承、候處、所々、而不相分候付、飯山御城下へ参り、御軍主掛、衆へ相尋、両角新右衛門と申仁、挨拶、右々様子承り記、

一、廿六日、飯山御城下へ練込、御人数左之通、

一、千人余、松代様、五十人程、須坂様、九十人程、田口様、九十人程、岩村田様、六七十人、諏訪、百四五十人、木曾、山村甚兵衛様、御人数不分、尾州様、此方様御人数之儀は、松代様隊長河原左京、云し人之差、而飯山御城中、練込、松代様義は、加賀海邊野尻宿、関川邊、御固メ、高遠様百五十人、山村甚兵衛様、三百人、松本在、尾原宿、而隊長、承り候、

一、爰に、高田城主榊原御氏、御規合、相成、右浪士之説、よつて、高田戦伐、信州大名不残差向し、高田を二里手前之宿、段々跡、陣、取、居、よし、江戸へ岩倉殿御名代参着、閏四月七八日頃掛合、よし承、

一、甲州道中人王寺宿迄、江戸三兵と云、而、閏四月十七日、右之宿追来、由、高嶋荷物、椽料之者、行合、大小隠し、荷札等も隠し、よふく、にけ来、よし言上、又甲府より十七日夜、早打到来、十八日、當藩柵沢至、早被仰付、見届、立、右押来、兵士ハ三兵又千人同心之類、式千人余、云、

一、廿日昼頃、岩吉、殿様、申上候、敵兵士義は、三坂峠一手、郡内白野迄一手、大ほさつ、峠、老手、鯉沢口へ老手、三坂峠黒駒之二手、甲府迎打追、三百人程人來、

よし、大将は林庄之助、云、籙本之よし、岩吉直、昼後に打返し、甲府遠見、御上之遣、

一、廿二日被仰付御家中出陣之用意、廿三日出立、人数式百人程、大将子野孫九郎殿、前廿二日、物頭久保嶋郷藏出立、人数三十五人茅野村泊、廿三日、金沢宿、又尾羽御人数金沢宿、廿二日、五百人、下ノスワ宿、飯田様人数五百人、よし、とふりう、早打行来、沢金宿、四、五度御座候、

一、廿三日、塩尻泊、尾州御人数朝より早八ッ追申付、七ッ頃甲州之方より早打参る、

一、廿三日、尾州人数、三四千人計城下之方へ通、是又尾州御人数、廿三日夜五ツ頃、灯焼、而、右人数、式百人程、是ハ金沢宿、泊、兼候、而、城下へ越申候、右同日雨降、

一、廿五日早打昼頃通、加籠三挺、是ハ城下之方へ行、廿四日、高嶋人数練出し金沢より臺ケ原宿、廿六日朝、真田御人数、甲府詰通、甲州より早打来、昼頃右同断、金沢宿、行、続々尾州人数一騎通、士分百人計、歩人、小もの士、式百人余通、大炮玉葉共、甲府御城番沼津様、關東方より頼出、京都、頼筋有之付、往來之、義、頼出し、御城番、於て京都御つかひ之上通、へくよし申、留、置よし、廿七日追之約束よし、越前福井勢、尾州勢、飯田勢、スワ勢、真田、松本勢、甲府手前、碓氷、跡々、居、塩尻追廿七日、掛合相済、成、廿八日、

飛脚通、六七度スワ城下、下之スワ追、下スワ宿、尾州御家老鳴瀬隼人正殿御人数千人云、

廿七日、尾州御人数、中へ挟、松本御人数通、尾州御人数は濃兵三百人計、共千人余、

大炮五挺車付、合印ハ二ツ引三ツかたは、鳴瀬様、先、白籙式本、壹本ハ天満と書有、

壹本ハかたはみ紋馬上、御出、御座候、錦旗先雨降、桐油紙、包被、大將馬上、

絶袋人負ひ行、朱羅紗之陣羽織、紫色義経袴、而、馬上御出陣堅メ之兵士、何、も若士五六十人程、朱色陣羽織、よしつね袴、而、軍勢不残、よしつね袴、陣羽織、御座候、

物御人数、物御人数、共、千五六百人計、陣、陣太鼓、手鎗之儀は、人足、荷、大炮五六挺、其外長持、甚道直数不知、七ッ頃追通、金沢宿、京都より保太郎、

堀園、廿八日、保太郎、保太郎、尾州若殿、元代様御出陣之よし、中仙道木曾海道、

大久手宿、式万人余之御同勢、而御とふりう之よし、廿八日、塩尻宿、追御先觸、

一、五月三日、毎日甲府より元代様御本陣迄、早打夜、三度、往來候、

同日承、甲府之義ハ、關東勢、林庄之助、人数三百人余、尾州、沼津様御西藩、而、

御召捕、相成、沼津様、御預、成、よし、加藤氏之嘸、御座候、又越後、出張、人数之方、

飛脚到来、大炮玉葉共、廿八日、歩人、遣、よし、越後、は、一戦、有、候、よし、

官軍越後高田、五千人程、廿八日、比、よし承、

一、五月四日、飛脚三度往來、五日、甲府之方より一度來、又四日朝五ツ半頃、鍋嶋様御人数、雜兵共、式十人計、鉄炮、鎗持、荷物も有之通、甲州之方へ、

四日、雨降、五日、早八ッ頃、晴、満水、成、申候、

一、五月七日、早飛脚、日夜、三四度、往來、候、何も尾州御人数之内由、

外、松本、飯田、松代、スワ、右之早打、御座候、内、鍋嶋様御人数も有之よし、

一、雨降、閏四月廿三日、五月九日、追天氣、晴々、數日、一日有之計、日々大雨、

八日、大満水、七日、八ッ頃、大雨、相成、暮方、は大満水、相成、八日、之朝、少々雨、小降、成、水、

引、式、尺、五寸、計、引、昼九ツ時分、大雨、成、又右之通、晴、成、丁、田、ふ、き、前、十、半、分、

長、廿四、五、間、崩、飯、嶋、り、役、人、中、人、足、式、十、人、計、引、連、來、土、俵、ね、杭、之、類、時、參、村、

方、は、田、持、者、追、來、共、拵、江、川、橋、向、詰、本、瀬、付、向、迎、礼、橋、木、落、橋、詰、人、崩、成、是、又、

田、持、もの、而、ふ、せ、く、事、切、口、村、分、は、無、之、安、國、寺、橋、下、而、切、る、よし、又、神、戸、中、嶋、而、干、

一、廿五日早打昼頃通、加籠三挺、是ハ城下之方へ行、廿四日、高嶋人数練出し金沢より臺ケ原宿、廿六日朝、真田御人数、甲府詰通、甲州より早打来、昼頃右同断、金沢宿、行、続々尾州人数一騎通、士分百人計、歩人、小もの士、式百人余通、大炮玉葉共、甲府御城番沼津様、關東方より頼出、京都、頼筋有之付、往來之、義、頼出し、御城番、於て京都御つかひ之上通、へくよし申、留、置よし、廿七日追之約束よし、越前福井勢、尾州勢、飯田勢、スワ勢、真田、松本勢、甲府手前、碓氷、跡々、居、塩尻追廿七日、掛合相済、成、廿八日、

飛脚通、六七度スワ城下、下之スワ追、下スワ宿、尾州御家老鳴瀬隼人正殿御人数千人云、

廿七日、尾州御人数、中へ挟、松本御人数通、尾州御人数は濃兵三百人計、共千人余、

大炮五挺車付、合印ハ二ツ引三ツかたは、鳴瀬様、先、白籙式本、壹本ハ天満と書有、

壹本ハかたはみ紋馬上、御出、御座候、錦旗先雨降、桐油紙、包被、大將馬上、

絶袋人負ひ行、朱羅紗之陣羽織、紫色義経袴、而、馬上御出陣堅メ之兵士、何、も若士五六十人程、朱色陣羽織、よしつね袴、而、軍勢不残、よしつね袴、陣羽織、御座候、

物御人数、物御人数、共、千五六百人計、陣、陣太鼓、手鎗之儀は、人足、荷、大炮五六挺、其外長持、甚道直数不知、七ッ頃追通、金沢宿、京都より保太郎、

堀園、廿八日、保太郎、保太郎、尾州若殿、元代様御出陣之よし、中仙道木曾海道、

大久手宿、式万人余之御同勢、而御とふりう之よし、廿八日、塩尻宿、追御先觸、

一、五月三日、毎日甲府より元代様御本陣迄、早打夜、三度、往來候、

同日承、甲府之義ハ、關東勢、林庄之助、人数三百人余、尾州、沼津様御西藩、而、

御召捕、相成、沼津様、御預、成、よし、加藤氏之嘸、御座候、又越後、出張、人数之方、

飛脚到来、大炮玉葉共、廿八日、歩人、遣、よし、越後、は、一戦、有、候、よし、

官軍越後高田、五千人程、廿八日、比、よし承、

一、五月四日、飛脚三度往來、五日、甲府之方より一度來、又四日朝五ツ半頃、鍋嶋様御人数、雜兵共、式十人計、鉄炮、鎗持、荷物も有之通、甲州之方へ、

四日、雨降、五日、早八ッ頃、晴、満水、成、申候、

一、五月七日、早飛脚、日夜、三四度、往來、候、何も尾州御人数之内由、

外、松本、飯田、松代、スワ、右之早打、御座候、内、鍋嶋様御人数も有之よし、

一、雨降、閏四月廿三日、五月九日、追天氣、晴々、數日、一日有之計、日々大雨、

八日、大満水、七日、八ッ頃、大雨、相成、暮方、は大満水、相成、八日、之朝、少々雨、小降、成、水、

引、式、尺、五寸、計、引、昼九ツ時分、大雨、成、又右之通、晴、成、丁、田、ふ、き、前、十、半、分、

長、廿四、五、間、崩、飯、嶋、り、役、人、中、人、足、式、十、人、計、引、連、來、土、俵、ね、杭、之、類、時、參、村、

方、は、田、持、者、追、來、共、拵、江、川、橋、向、詰、本、瀬、付、向、迎、礼、橋、木、落、橋、詰、人、崩、成、是、又、

田、持、もの、而、ふ、せ、く、事、切、口、村、分、は、無、之、安、國、寺、橋、下、而、切、る、よし、又、神、戸、中、嶋、而、干、

聞計切。桑原下より、小和邊追者、何十処云事なく、切口出来候よし、捨水路より飯嶋尻追向、田部村上造、一圓相成候、八日七ツ頃追印、七ツ下より、大風吹出、夜九ツ頃追吹、雨ハ小雨相成候、九日朝、少々降、晴て天氣成、當日水ハ引ず、

一、五月九日夜五ツ頃、早飛脚加籠、甲州之方通、

一、十日、早加籠、度往來、又、松代様御人数、歩兵、歩人百五六拾人、甲州へ往、又、尾州歩人六百人程、甲府より江戸と追通行のよし通事、

(上段注) 満水盛り上之時分、

凡六尺五寸計有、

14

一、會津之義は承所、國內敵數相堅居よし、又侍七分國中往來よし、口々江戦地之用意、落し穴等教有之よし、大宮より會津勤請之方屋俵引戻之節之斷、たしか成事候、又會津之義は、庭敵之命を御免相成候よし、五月十日承、如何之事哉、

(58)

一、十二夜明より降、はげしく成、昼四ツ頃追、大満水成、八日之日の水之通成申候、組頭田前へかこひ出、

(59)

一、十三日朝追、十二日より土手夜明す、十三日朝、多分水引而、朝五ツ頃より、又雨大降成、四ツ頃追、大満水成、茅野橋下切、横内、押掛、村中を押破、せき中嶋、押出に來、小江川土手、満次郎田前式拾間程切、飯田耕蔵田前五六間、江川橋場秋葉田前、新石衛門裏前田請土手式十間計切、前田本土手二間計横、式十間計、夕七ツ頃、雨小降成、水引始、江川橋落、神戸橋落、茅野橋落、車橋落、橋々不殘落よし、前代未聞之大満水候、

(60)

一、十四日朝五ツ頃、丁田物助田前五間程切、小雨一日降、夕七ツ時より小々晴、川流死人式人計有、横内もの、ハツ手新田之者、又夕八ツ頃早加籠四挺通、甲府より、又半時計跡より二挺來、是ハ何も尾州之よし、十五日早加籠、四度往來、皆尾州之下し、

(61)

一、十五日、江川橋語飯田前、前田請土手、右ニヶ所水留、夕暮追雨降、大風吹、葦方西風成て吹て天氣成、當日ハ迎之廻り也、明十六日、甲辰辰辰日參詣也、

(62)

一、十八日、昼頃より雨降出し、夕七ツ頃より大雨成、十九日朝追に大満水成、朝五ツころ、丁田上取こぼし分、土手五十間計切、古川通大水成、飯嶋村より三人參り、江川下重太郎田前土手切段、式十間計成、四ツ半頃、又右同村、而、赤田土手、下川神戶村平内田前切、段々余分成、四ツ半頃、四五間計成、又、横内村分孫左衛門洲土手、百間程切、右村大さわき成り、段々切口、手前江川除方奉行居合、村中ねこむしろ、俵類不殘集め、或ハ式間木、はぜ木、幟竿等持出し、かこひしらへ、ふせき候得共、終かこひ三重押破、

(63)

凡村へ押掛ケ來、横内中田押出し、上原分せき中嶋、押出し、大清水川請土手一圓押破、又、小江川請土手、染次郎請土手、先切口より始、三十間程切、前田通へ押破、先切口水留分不殘切、

一、又宮川土手、宮川大橋下、三十間程切、是ハ沖田浦へ押出し、同土手五六間計、老ヶ所切、長手へ出、大橋場十五六間切、横内孫左衛門洲より水ひろがり、横内押通し、せき中嶋、九頭弁平、前田より下甲不及、古川は大川成り居、

沖田地ハびわ池より新井村少々下より、大熊下ハ神宮寺村宮之脇湯尻より下、下筋追一圓水ひかり成、福嶋、出文、小川両村一類之方へ、内立退、賞分之所、備家居、外山浦下筋追、川筋は不申及、沢押出し、

15

作場大變之荒成、當日夜、四ツ頃追雨不止降續、夜通し平中松明、ちうちん天うつる如く也、

一、十八日、尾州大山城鳴瀬隼人正殿御人数、甲府より御引取成、十七日都巨三百人程、

十八日、殿様御人数五百人、程歩人共八百人余之よし、真先、先拂土老人、續而土百人計、白あぶの御は十六之菊御紋付一流れ、跡、大山定紋之赤はた、ハ、五尺程、片はミ之紋計、跡、ばれん行れつ殿重也、廿日、大山御家老人數六百八人余之、

人数也、又スワ、高遠、松本御人数之隊は、駿河之駿府様土御警衛來よし、スワ大砲方之儀ハ、甲府、而、柳原之宮様御敬衛、表御前番被仰付候由、場所は甲府一連寺之よし、水野様義ハ、御城代御免成候よし、又、真田様被仰付候よし、

猶又、此度之雨降荒之義、隣國不殘、當國高遠、飯田、尾張、松本より、越後追大あれ之よし、甲州ハ少々輕きよし、前代未聞之事也、スワ荒所、殿様式万石程之よし也、

一、廿日、横内村當村中見舞として、水ふせき人足、村中老人ツ、出擁、而、十九日、廿日両日參、又、神戸村南組田中、両沢押出し、山開南組、頼重院下、鹿松庄左衛門、式軒押圓す、頼重院隱居所土水石共少押込、山崩場所は頼重院沢奥、

御嶽山宮之山崩出、又田中組、寺之裏より両方へ分れて押出、田中之桑右衛門、

よ、云見世之前へ押出、大石大木數不知、水重屋押うめ之數十六間也、

一、又廿日、昨日より、美濃之加納様御人数、兩日甲府より引取往來、

横内村荒所之内、家五六軒押圓し、土蔵二、三ヶ所右同斷、第一番、弥五兵衛、傳藏、駿藏、右家、十九日、押圓、跡ハ廿日引水成、右同斷、又小江川請土手、染次、

田前切口ニヶ所、上ハ十五六間、下ハ六七間、手前持田より上、染次分六七間上より切口、是ハ小口之分也、且又、葦野村、而も山押出し有之候、弥以、廿日より天氣上、右雨天之日數、二百二日成候、且出度存候、

(67)

官軍すけ

一、十五日、江戸東叡山、勅命之意を再參東叡山下遣し候得共、一圓御返答もなぐ
罷有候付、官軍、於も勅命、ないかしろに致し候義、不屈思召、五月十五日
早朝、上野へ軍勢、差向、先陣として、藤遠、諸家せめ寄る、又せめ様は
上野下町へ火掛、又は江戸口々橋々など官軍、而はつし置、焼打之様意
致しせめ寄、時、南風はけしけめ寄、時、遠藤、官軍、裏替、関東
付、相成、後同官軍方へ炮發、及び候處、関東勢ひ、先陣故、藤遠目掛、炮
發つらかはりし故、官軍は猶又、藤遠下野方へ打ち掛、然時、藤遠
陣軍、相成し、上野の方へ欠込候よし、都立三日の間た、かひ候よし、上野之
方、而即死四五十人、藤遠武百五十人計、官軍、而ハ、三十人計手負も小々有之
よし、関東勢、まづは以軍之下し御座候、

16

一、又廿二日晚、越後出陣之勢ひより、早打到来、越後、而は多分之御話故、兵糧等
すくなく候付、国元より殿様、而、豆米等煎、駄荷して越後勢ひ江送、
軍愛、有之下し、惣方何も見召居候よし、又関東勢、は上野東叡山、
山、追立られ、十六日夜、官様御供して、何方ともなく三方へ落行よし候、右之
よし、當國殿様へも江戸御屋敷御留守居より御沙汰有之候、

一、廿七日東叡山落武者三千人程、甲州海道へ集、廿八日、承、（黒野田） 處、黒めた宿迄
来、よし、甲府より當國、而差出し置御人数へ、柳原殿より被仰付、増、御人数
相出し候様、御沙汰、廿七日昼頃、はや打加籠、挺来、何方之飛脚、三
四度来、廿八日朝、御人数百人程、大砲持參、當御家より相詰、當日も飛脚
か、三四度往来御座候、又は東海邊根山へも出集之下し、是又沼津
之城、乗取候よし承、候、

一、五月晦日、官軍尾州御人数、犬山勢五百人程通、右は又甲府話之よし、
明六月一日、犬山御本陣、先達より、塩尻、瀬場両宿と、ふりう致し居
り、引返し、又甲府、話通、よし候、飛脚往来五六度位致し候
来、よし申候得共、今日は不通候、名古屋御人数早朝より通、続き御座候、大砲五六
挺通、小砲ハ銘々候、仕度ハ麻布袴、ツ、ほ、こら山笠、色々、而通、
一、六月朔日、美濃国甲城主御人数、百五六十人通、尾州も當日通、毎日尾州へ通、候、

五日迄

一、四日朝、早加籠、挺、甲府方へ通、是ハ江州彦根御人数之下し御座候、彦根先陣は、
人馬也、

一、五日期五ツ頃、尾州御人数八九十人計甲府方へ行、是ハ犬山御藩候、四ツ頃早加籠通、甲府
より加藤芳右衛門殿手紙送、暮候、飯田氏より被遣候、又彦根御人数之儀ハ、塩尻宿泊
金沢泊、行、都立八百人之下し、

(68)

(69)

17

一、六日は、飲肥城主伊東修理太夫高五千人巨石、右之城主、御人数五百人程昼頃通、甲府
印ハすつほ、羽織袖、白●御座候、大将分ハ白色ノ馬、乘、笠ハから山、白毛ノ植置笠也
袴ハよし、袴、色ハ一、揃ひもへぎ色也、ふへ、太鼓持參御座候、承、候處、沼津城主、小田原
之城主、何も裏替、関東勢ひ、組し、甲府なども夜にけ等致し候も、関東へ組候故之よし、
右付、京都、於ても浪人共、両城勢、伐致すよし、甲府話之入々、何も甲府より次第
く、繰出し、両城せめ致しよし、又承、小田原へ唐船百艘計付しよし是、
関東付加勢、見へし哉、

一、八日、高嶋人数引取、成返、併人数之内、甲州古閑番人、參り居、ものハ未不返候、又尾州人
数、八日、九日、十日、追引取候、鍋嶋も返、日向国飲肥人数、乘馬等九日、も甲府へ行、右諸家引取
之儀ハ、小田原沼津等之事片付、相成故之よし、沼津儀ハ御わび申、小田原先陣致し
候よし、小田原義ハ、向參致し、殿ハ寺へ入城、而、謹道、并家来共、追、関軍へ差出し、関軍
請取候よし、まづ大前、而之仰付候よし、

小田原せめ大名、は、因州、土州、越前、高遠右四家之よし候、
一、十三日朝五ツ頃通、是ハ御家人数、駿河御古閑番行し人数、大将、は久保嶋郷藏、人数三
十人余、歩人共、五十人計引取候、是、而甲府話人数ハ不殘御返し、相成候、古閑、代、は、藝
州様之よし、

(70)

一、越後之義ハ、又童三日、四日戦ひ有之候よし、後、早打到来之よし、又は澤市左衛門
殿、大將、而候得共、如何之義哉、越後より早加籠、而參着、又十一日、出立之よし承、
〇、十五日名古屋海道より使、（勅使） 而、富、入部、云し人、當社、參着、勅使ハ加籠、若草
式人、割羽織、よしつね袴、手鎧銘々持參之よし、外、士志人、是、鐘持參、荷物、ハ
両掛、荷目候、當社、而、高部、峠下、山之神、追、小社人ハ罷出候、代官、義ハ、藤次、追
出迎ひ申候、五官、西奉行之義ハ、峠口迄出迎ひ、大祝、屋敷へ入、七ツ半頃着御座候、
何も上下着用、〇、又大祝方、而一同、申渡し候、は、勅使、つめ出、今般、大上館
より被仰出之趣、五官、衆、申渡し置候間、被承候様、申候、右、已、而、皆々引取返
る、昨日罷出趣承、候、

(79)

一、十七日、勅使大宮へ參詣、改メ致しよし、十六日、高嶋へ富田渡屋敷、勅使申遣
十七日、郡奉行、見分致しよし、仲間一同宮へ相詰、昼頃より夕立之
天氣、成、九ツ半頃米降、夕七ツ頃甲州方より早打加籠、城下之方へ通、申候、

(72)

一、十九日、官方一同大宮へ相詰、勅使より被仰付、よつて、御鉄（并）、士、二ヶ所
取拂、成、不動堂、薬師堂、護摩堂、西、三門、釈加堂、勸喜堂
賢

(73)

鐘堂、不賢堂、五重塔、右之場所、高嶋、郡方下役、徒目付、足輕
出張人足纏、御勅使、從御士三人出張、高嶋出役、申付被為卒人、御鉄
塔之義ハ仲間一同、が、（雅美） 衆、外、小社人中、而御内神へ入、鉄塔、（兼） わし持出し、五官も

(81)

共打(わし候よし、

一、廿日前 十九日、神領人足^{申付}被爲卒^云共一切手^付ず、下役 足輕共も、こま

り入、引取、廿日^{郡方式}人、下役、足輕、宮寄^{出役}致し、高嶋人足、安国寺村、新井

田部、大熊、真茅野、有賀、小坂、都宮^{六百}人余、人足村々役人共、人足^右呂連、大宮、相詰、

勅使、早朝御見分、郡方^{申付}、今日中^{取拂}わせ候様^{申付}置、下スワ宮へ御越^成、

御勅使役人^老人残^居、せ話致^え、郡方^{さし}す^而、右^{五百}人^{申付}候得共、又々

一人も手^付るものなく、こまり入、暮方引取、郡奉行、御勅使^{より}スワ因幡

守義、庭敵^成京都^{申達}、越候^{申上}し、

一、神宮寺、如法院、法花寺、蓮池院、大上館^{より}申付られ、玄^遣致^し、

思召^以、土成^々、六月十九日^{寺へ}帰着、下宮神宮寺、三清寺、勸正寺、是^上。

18

宮^{同断}御座候、

〔解説〕

(1) 冒頭に、本史料の執筆者である丸頭井太夫矢鳥信智の歌を記している。その後に、慶応四年の寒中の寒

暖のことについて記している。

(2)

慶応四(一八六八)年三月五日、中山道鎮撫使岩倉殿、下諏訪に到着。鎮撫軍は美濃大垣藩戸田采女正

鹿兒島藩、土佐藩松平土佐守、長閑国毛利大膳大夫、遠江国井伊掃部頭、伊勢高須藩松平榎津守、西大路殿。

実際に東山道鎮撫軍が下諏訪へ入ったのは、二月二十八日。

鎮撫使岩倉殿・大将岩倉殿者御兄弟、東山道先鋒軍の総督は、岩倉親の次男 岩倉貞定(山岩倉三

位 一八五二―一九一〇)、副総督は三男の岩倉貞経(八千代丸 一八五二―一八九〇)。

美濃之大垣戸田采女正殿 美濃国(岐阜県)大垣藩主第十一代藩主、戸田氏共(一八五四―一九三六)。

薩州鹿兒島藩 十一代藩主 島津忠義(一八四〇―一八九七)

土佐国高知城主松平土佐守殿 土佐守は十五代 山内豊信(宍倉堂 一八四八―一八七七)。この時の藩

主は十六代 豊範(一八四六―一八八六)。

髪甲 薩摩、長州、土佐藩が江戸幕府接収の時に戦利中として奪ったヤクの尻尾で作ったもので、元来

兜に付けるものだったが、上記二藩の士官が軍帽として被ったものか。

にら山笠 葎山笠。幕末に葎山代官の江川太郎左衛門が考案した、士卒が被った笠。

長閑国毛利大膳大夫殿御藩 長州藩。毛利大膳大夫は十三代藩主毛利敬親(一八一九―一八七二)の

子。

遠江国城主井伊掃部頭殿御藩 近江国の間違であらう。彦根藩。藩主は十六代 井伊直徳

勢効高須松平榎津守殿 高須藩は勢州(伊勢国)ではなく美濃国。松平榎津守は十二代藩主 松平義勇。

西大路殿 市橋長和(一八二二―一八八二) 仁正寺藩(近江国) 別名 西大路藩 第十代。

(3)

三月 東海道鎮撫使は、柳原殿、橋本少将殿、軍報有栖川帥宮。軍勢は薩摩藩、尾張藩、小田原藩、沼津藩、筑州藩、長州藩、江戸口高輪、品川に薩摩藩と長州藩が固める。

柳原殿 公家。柳原前光(一八五〇―一八九四)。大正天皇の伯父。東海道鎮撫副総督。三月から十一

月まで甲府鎮撫使。

橋本少将殿 橋本実梁(一八三四―一八八五)。公家。東海道鎮撫総督。

軍将有栖川帥宮様 有栖川宮熾仁親王(一八三五一―一八九五)。東征大総督。

(4)

北陸道勅使には、正親町三條前大納言。先陣は江戸口の千住宿に入る。

北陸道勅使 北陸道の鎮撫総督は高倉永祐(一八三九―一八六八)。

正親町三條前大納言殿 正親町三條実愛(一八二〇―一九〇九)のことか。公家。倒幕に寄与。

中山大納言殿 中山忠能(一八〇九―一八八八)。公家。倒幕に寄与。

(5)

三月四日 中山道軍は、下諏訪から分かれ、甲州道は、土佐藩、因幡藩。諏訪からは四十人、高遠藩が先

陣で八十人。諏訪から甲府までの軍費を負担する事になった。先陣は高島藩の大将千野新左衛門が門を開

けて押し入り、因幡藩と土佐藩が続き、甲府城は降伏した。その後、城番には松代藩が入った。松代藩は、

五日に甲府城番を言い渡された。

東山道鎮撫軍の支隊は三月一日、本隊は二月二日に、下諏訪を出発した。

因州 鳥取藩 十二代藩主 池田慶徳(一八三七―一八七七)。

御本陣大将和田豊前 鳥取藩の家老か。

御まかな方 御賄方のことか。ここでは費用を調達する役だと思われる。

柳町口御門 甲府城柳町口の門。

千野新左衛門 房孝。早馬の名流、天狗党争乱時の火付奉行。慶応三年には御軍事御調掛。

臺石荷物式 クルツ砲か。

松代様 十代藩主 真田幸民(一八五〇―一九〇三)。

(6)

三月一日 岩倉殿、三月一日に下諏訪へ泊まる。

三月二日 岩倉殿、和田宿へ泊まる。因幡、土佐、高遠、川越諸藩、大和様は上諏訪城下の湯の脇から赤

羽根の間で宿泊。土佐藩士は、甲州街道を甲府へ向かった。

和田宿 小泉郡長和町和田にあった中山道の宿場。江戸から二十八番目。

高遠 信濃国高遠藩。十一代藩主 内藤直頼(一八四〇―一八七九)。

川越藩 藩主 松平康英(一八三〇―一九〇四)。

大和 内藤直頼のことか。

湯之脇 諏訪市湯之脇。

赤羽根 諏訪市上諏訪。

甲着羅紗 甲着け、羅紗の制服(階級によつて羅紗、大羅紗、小倉織)。

せいよう小筒 西洋小筒か。小筒は小型の銃。小銃。ケール銃、スタール銃のことか。

つつほう 筒袍。つつほう。筒袖のこと。和服で、袂がない筒形の袖
たんぶくろ 段袋。駄袋。たんぶくろ。幕末から明治初期にかけて用いられた、武士の用いた和式様
装のズボン。

葛木 甲州街道の宿場。諏訪郡富士見町落合。

(7) 三月三日 昼十二時頃か、因幡藩が甲州街道を甲府へ向かった。

(8) 三月三日 午後三時頃か、和田峠から中山道軍が引き返し、葛木宿へ宿泊。金沢宿からの早馬で和田峠の
軍勢が引き返した。早打ち、早馬が人回往復した。

和田峠 中山道下諏訪宿（諏訪郡下諏訪町）と和田宿（小泉郡長和町）の間にある峠。

金沢宿 甲州街道の宿場。茅野市金沢。葛木の一つ諏訪側の宿場。

はや馬 早打ちの使者が走らせる馬。また、その使者。

はや打 馬や籠籠を走らせて急を知らせること。また、その使者。

玉薬 銃砲弾を発射するのに用いる火薬。弾薬。たまぐすり。ぎょくやく。

(9) 三月四日 朝六時頃、土佐藩軍が甲府へ向かった。早打ち籠籠が一挺通った。後から真田軍が 通過。
短筒 銃身の短い鉄砲。短銃。

海松色 海松茶色。みろぢや。暗い黄緑色。

合目印 合印のことか。他と区別するためのしるし。特に戦場で敵味方の区別をするために、兜や袖の
一部につけた一定の標識。

御用人 江戸時代の武家の職名。主君の身边にいて、日常生活一般の管理にあたり、家政をとりしき
る業務担当の文官。

飛脚 書類、金銀などの小貨物を郵送する脚夫の名称。

(10) 三月四日 伝聞で諏訪郡は、先日の高松殿の甲府攻めと同じで、甲府長禪寺前に陣取った。土佐藩は、葛
木宿へ泊まっていたが、本陣に許可を得て甲府へ向かった。

三月六日 甲府城占領。官軍は、葦崎宿から石和、栗原までに宿泊した。

甲府城が実際に引き渡されたのは、三月四日。

高松 高松実村または高松隊のこと。実村は公家。慶応四年に高松隊を結成し、信濃に入り、道々で武
士や農民など、軍勢に合流することを触れ、高島藩士や諏訪神社の神職たちも従軍したが、二月に後
から進軍してきた東山道鎮撫軍から、勅許を得ていない偽勅使たということで、高松実村は京都へ送
還され、軍勢は葛木で解散した。

甲府長善寺 長禪寺のことか。武田信玄の母の菩提寺。甲府城の東部、愛宕山の南麓にある。

官代 代官のことか。

手代 町人、百姓の中から採用された収税、事務を助けた小吏。

同心 庶務、警察をつかさどった下級の役人。

山口之関 北杜市日州町上教来石にあった関

人馬継立 江戸時代、公用貨客の人馬による宿継ぎ輸送。

甲府城代 慶応二（一八六〇）年八月に甲府勤番が廃止され、甲府城代が置かれた。松平右京亮が慶応
二年十二月まで、大久保加賀守は慶応四年三月、水野出羽守は、官軍によって同年三月から城代となつた。
松平右京亮は、松平（天河内）輝声（一八四八—一八八二）、大久保加賀守は九代小田原藩主 大久保忠
礼（一八四二—一八九七）、水野出羽守は、八代沼津藩主 水野忠敏（一八五二—一九〇七）。松平、大久
保は在城せず。

綱附 捕縛。

葦崎 山梨県葦崎市にあった甲州街道の宿場。

臺ヶ原 山梨県北杜市にあった甲州街道の宿場。

甲陽城 甲府城。別名舞鶴城。

石和 山梨県真由川市にあった甲州街道の宿場。

栗原 山梨県山梨市にあった甲州街道の宿場。

(11) 三月三日 下諏訪から追い立てられた相楽総三を大将とする赤報隊は、樋橋におり、薩摩、因幡、高島
藩が掛け合って、降伏した。大将八人と雑兵五・六〇人が召し捕られ、残りは欠け落した。他の十一人は、
頭を平刷りにし、甲州口へ追い払われた。打ち首となつた首は、処刑場所に三日間晒され、追い払いとなつ
た人の中に、金沢宿、高木村、下諏訪の者がいた。

相楽総三は、三月三日に、仲間七人とともに処刑された。

三月四日 昼後に、土佐藩の六人が早籠籠で先勢に追いつくために通過した。因幡藩も同じ。

三月五日 早籠籠一・二度通過。

下スワより追立候浪人 赤報隊のこと。

樋橋 下諏訪、和田峠にある地名。

佐柄（相楽）総三 相楽総三（一八三九—一八六八）のこと。幕末期の浪士。赤報隊長。本名 小島四郎

左衛門将満

下之スワ立町迎友之町重右衛門持地麦畑 下諏訪町魁町の魁塚（相楽塚）のある場所。魁塚は、相楽

等が処刑された場所に、昭和五（一九三〇）年に建てられた。

高木村之足軽 下諏訪町高木

(12)

三月 東山道軍の大将である岩波殿の兄は十八歳、弟は十五歳。近習方は長州勢、先陣は美濃大垣藩、警

衛衆は尾張・因幡・土佐・肥後熊本・柳川、信濃国の藩は上田・小諸・岩村田・須坂・松本・飯田、甲州

街道は諏訪・高遠・座光寺・山吹藩が担当した。下諏訪の逗留代 は松本藩が支払い、甲州街道は上諏訪

から甲府までは、諏訪・高遠藩、甲府から新宿までは甲府代官所、新宿から江戸での逗留代は諏訪・高遠

藩が負担した。

肥後熊本勢 肥後国熊本藩、十二代藩主 細川護久（一八三九—一八九三）。

柳川勢 筑後国柳川藩、十一代藩主 立花鑑寛（一八二九—一九〇九）

上田 信濃国上田藩 七代藩主 松平忠礼(一八五〇—一八九五)。

小諸 信濃国小諸藩 十代藩主 牧野康済(遠江守 一八四二—一九二八)。

岩村田 信濃国岩村田藩 七代藩主 内藤正誠(志摩守 一八四五—一八八〇)。本書では豊後守。祖

父の正繩(一七九五—一八六〇)は豊後守。

須坂 信濃国須坂藩 十四代藩主 堀直明(一八三九—一八八五)。

松本勢 信濃国松本藩 九代藩主 松平光則(一八二八—一八九二)。

飯田勢 信濃国飯田藩 十二代藩主 堀親義(一八二四—一八八〇)。

甲州道中 甲州街道のこと。江戸日本橋から下諏訪に到り、中山道と合流する街道。

座光寺 信濃国山吹陣屋。交代寄居旗本十二代 座光寺為翁。

山吹 山吹陣屋のこと。

(13) 三月 諏訪から東山道軍へ献上したものは、騎馬一疋、大砲一挺と玉葉、土佐藩へ騎馬一疋。甲州街道軍

の先陣は諏訪・高遠は一隊づつ、諏訪の大將は千野新左衛門、立木与兵衛、小沢氏家中四十人、歩兵百人

余、他に賄方数人、上原村からは八人が江戸まで送り、四月二十三日までに帰らない者も多くいた。

立木与兵衛様 立木定保。

小沢氏家中 小沢家は小沢虎敏家か。

(14) 三月 松本藩五万八千石が尾張藩預かりとなり、分杭が建て替えられ杭には「天廷御領尾州御預り所」と

書かれた。

(15) 三月四日 諏訪忠誠が江戸を出立。江戸屋敷を引き払い、屋敷にあった物を、甲州街道や中山道を毎日運

んだ。

當郡大殿様 諏訪忠誠 信濃国高島藩 九代藩主(一八二一—一八九八)。

江戸御屋鋪 幕末時の上屋敷は蛸殻町(中央区日本橋蛸殻町二丁目)、中屋敷は元矢ノ倉(中央区東日

本橋二丁目)、下屋敷は渋谷(渋谷区渋谷一—三丁目)にあった。

(16) 二月〜四月 徳川慶喜、東叡山に駆け込み、僧体となったという風聞あり。輪王寺宮は東山道軍総督有栖

川宮に慶喜の助命を嘆願し、慶喜は、水戸藩の預かりとなる。江戸城は紀州徳川家の預かりとなる。

なお、徳川慶喜が実際に寛永寺に移ったのは、二月十一日。輪王寺宮が、慶喜の助命嘆願のために東

海道軍を訪れたのは三月七日、水戸へ行くために出発したのは、四月十一日。江戸城をその後管理した

のは、紀州藩ではなく尾張藩。

徳川慶喜 十五代將軍 徳川慶喜(一八三七—一九一三)。

上野御宮 輪王寺宮。上野寛永寺眞首、日光輪王寺門跡。北白川宮能久親王(一八四七—一八九五)。

相州小田原城 小田原藩 九代藩主 大久保忠礼(一八四一—一八九七)。

水戸 水戸藩 十代藩主 徳川慶篤(一八三二—一八八八)。

紀州殿 紀州(紀伊)藩 十四代藩主 徳川茂承(一八四四—一九〇六)。

(17)

三月六日 午前七時頃までに、因幡藩の荷物が甲府へ向かうために通過した。この日まで鎮撫使の軍勢は

甲府に逗留のこと。早蕨籠が三度行き、江戸から高島藩の關係で一度来る。四日も早蕨籠来る。江戸から

他所へ行く飛脚は、甲府方面へ向かう。

(18)

三月六日 二日から六日まで雨か雪が毎日降っていた。大風も吹くことがあった。

三月七日 早蕨籠・早馬、五・六度往来する。午後六時頃、殿様が到着するので、甲州石和の先、勝沼宿

の先で関東勢と官軍が戦闘状態なので、迎えに早蕨籠で家老千野源一郎などが向かった。

御家老千野源一郎 千野徹一郎貞徹のことか。

寛坂太 寛酒本富邦。慶応四年は二月二日東山道軍に従い、江戸まで出張。三十日帰着。

矢崎七郎 慶応三年から江戸勤番で、翌年、諏訪忠誠の警護をし、諏訪へ戻る。九月十六日に信濃路騒

動で追分(軽井沢町)まで出兵。十月六日帰着。

(19)

三月七日 甲府城での合戦では、官兵の先陣を諏訪勢が勤め、千野新左衛門が大將だった。この合戦につ

いては不明。

(20)

三月五日 甲府城は官軍のものになる。松代城主真田信濃守が城番となり、追手(門か)先に高札を立て、

当分の処分は諏訪、因幡、土佐藩の預かりと記されていた。

(21)

大殿(諏訪忠誠)が諏訪へ戻る途中、鳥沢に宿泊していたところ、幕府の散軍が大殿を討ち取ろうとして

本陣へ斬り込みに入った。殿様は医者籠籠に乗り、夜通し引き返し、高井戸御用人源助という者の所に暫

く逗留した。

三月十三日 大殿、高井戸御用人源助方を出発。

三月十九日 大殿、諏訪高島城へ到着。

鳥沢 山梨県大月市にあった甲州街道の宿場。

高井戸御用人源助 不明。

御家老千野孫九郎 千野貞篤。

(22)

三月十日 甲州方面から早打蕨籠が三回来る。甲州へ四回行き、二回は夜に通った。午後四時頃から雨が

降り出し、夕暮れに大雪となる。

(23)

三月十一日 早朝に早打蕨籠が二回甲州方面へ行き、昼頃から夕方三回、右の方へ行く。一度は土佐藩の

蕨籠。

(24)

三月二十日 お姫様、貞昭院様、まき姫局が諏訪へ帰ってきた。

御姫様 不明。

貞昭院様 貞鏡院のことか。
まき姫局 不明。

(25) 三月二十二日 殿様御手掛 奥女中たちが帰城した。江戸屋敷は残らず引き払い、荷物は両街道(中山道と甲州街道)を日々送られてきた。
両海道 中山道と甲州街道のことか。

(26) 三月二十三 東海道、中山道、甲州街道、北陸街道の鎮撫軍が江戸へ入る。
板橋 中山道、川越街道板橋宿。日本橋から数えて最初の宿場。
千住 日光街道、奥州街道千住宿。日本橋から数えて最初の宿場。

(27) 四月十日 江戸城の受け取りとなり、岩倉軍が受け取る。岩倉軍は一度江戸城に入るが、すぐに板橋の本陣に引き取る。江戸城は長州藩の預かりとなる。諸道員は旗本達が持参した。徳川家、和宮、天昭院と局は清水御殿と田安御殿へ移動した。徳川慶喜は水戸預かりとなり、十一日に出発。輪王寺宮は日光へ行く。
和宮様 仁孝天皇の第八皇女。孝明天皇の妹。親王内親王。十四代將軍徳川家茂に嫁した。
天昭院様 天璋院(一八三六—一八八三)のことか。十三代將軍 徳川家定の妻。
清水御殿 御三卿清水徳川家の屋敷。
田安御殿 御三卿田安徳川家の屋敷。

(28) 三月 東山道鎮撫軍が倉賀野宿に到着したとき、熊谷土手辺りから安部撰津守領地内で浪人たち二・三百人が集まり、略奪の限りを尽くしていた。安部から東山道軍へ討伐を依頼し、美濃大垣勢が夜討ちで壊滅させた。
倉ヶ野宿 群馬県高崎市倉賀野にあった中山道の江戸から十二番目の宿場。
熊谷土手 荒川の熊谷近辺の土手か。

安部撰津守殿 武蔵国岡部藩(埼玉県深谷市)。安部信発(一八四七—一八九五)。

(29) 三月 碓氷峠には桃井常五郎という悪者がおり、手下百四・五十人を連れ、官軍先陣と言い立て、峠に陣取り、通行の人々を悩ませていた。桃井は百姓に討ち取られた。

臼井峠 碓氷峠。群馬県安中市松井田町坂本と長野県北佐久郡軽井沢町との境にある峠。
桃井常五郎 桜井常五郎のことか。桜井は佐久郡春日村の者で、嚮導隊に参加し、北信分遣隊の遊撃隊長となる。二月十四日に碓氷峠を占拠し、上野方面へ進出。しかし、東山道鎮撫総督府から、偽官軍であるとの回章があり、北信分遣隊は、二月十七日に追分宿(北佐久郡軽井沢町)の大黒崖に宿泊していたところ、小諸藩と御影陣屋の兵に攻められ、戦死や捕縛され、逃亡した者もあった。桜井は、降伏を良しとしなかったため除名され逃亡したが、佐久郡発地村(軽井沢町発地)付近で捕らえられた。
三月六日に、追分宿の刑場で処刑された。

三月二十一日 北陸道鎮撫軍は、二十日頃越後国高田辺から善光寺道へ出、二十一日の晩に上田城下に泊り、追分へ出て中山道へ出たという。

越後国高田 現在の上越市の一部。江戸時代には高田藩があった。六代藩主 榊原政敏(一八四二—一九二七)。
信州路善光寺道 中山道追分宿から直江津に通じる脇往還。北国街道の一部。北国脇往還ともいう。
追分 北佐久郡軽井沢町にあった、中山道の日本橋から二十番目の宿場。北国街道の起点。

(31) 二月か 仏・米・英・蘭・中国・ダッタン六ヶ国が参内した。フランス人が帰る途中で百姓十五人に斬り殺され、七人が死亡した。
この事件については、伝聞のせいしか、日付がなく、何の事件にあたるのが不明である。二月十五日に、土佐藩兵がフランス軍艦の水兵を殺傷した堺事件があるが、これは、参内には関係がない。

二月二十日にイギリス公使、パークスが参内しようとしたところ、朱雀操と三枝翁に襲われる事件があった。
だったん国 普通ならばタタール人のことだが、ここではプロイセン人のことか。
植村 林藤太郎 不明。
土津川村 林田勝太郎 朱雀操のことか。朱雀の本名は林田衛太郎貞賢。

(32) 一月 諏訪因幡守家来医師 大山玄順、京都へ出奔のこと。
當国城主諏訪因幡守家来醫師大山玄順(一八二七?) 一月十一日出奔。二月十一日、京から帰る。
四月二十九日に脱藩。

(33) 正月改元、新政府の人事
閏四月二十一日に、明治政府が政体書を作成し、新政府の組織について示したのでこのことか。
旧暦慶応四年九月八日に明治元年に改元した。

(34) 三月 赤報隊に諏訪忠誠、金子・馬献上のこと。
茲野井殿 滋野井公寿(一八四三—一九〇六)。慶応四年一月、綾小路俊実と赤報隊の盟主に擁立されるが、京へ戻された。明治元年十月に甲府県知事兼甲府城守となる。

(35) 四月二十六日 越後新発田城を会津浪人五千人程が攻め寄せ、藩主の溝口直正は降伏した。高田城主も同様で、新発田を先陣に、信濃路に乘襲するという風聞が立った。先触が松本まで来る。真田は甲府城の城番をしていたが、松代藩領まで攻め寄せるといふ風聞があるので、東山道総督の岩倉から城番を解任してもらい、四月二十六日まで松代に戻り、国許を堅めた。諏訪氏にも頼み、侍五十人はかりを加勢に送った。諏訪勢は二十日に出發した。

越後国柴田之城 新発田城。新発田藩(新潟県新発田市)の藩庁。
溝口 新発田藩主。当時は十二代溝口直正(一八五五—一九一九)。

(36)

四月二十四日 諏訪忠誠忠礼は、四月二十四日出発のところ、松代援軍のため、病氣願いを出し、延期した。

(37)

閏四月三日 諏訪忠礼は会津浪人追払のために、閏四月三日に出発した。会津浪人は、越後高田から飯山に泊った。晩に、真田軍が挟み撃ちにした。諏訪勢は越後方面へ追撃し、閏四月六日になっても、戻つてこなかった。

飯山 信濃国飯山藩 九代藩主 本多助龍(一八五四—一八六九)

三國峠 不明。

(38)

四月二日 官兵は江戸から四月一日に出発した。彦根・薩摩・大垣約三千人が宇都宮まで来たところ、会津勢は宇都宮城に引きこもり、戦闘となった。

四月十八日 宇都宮の会津勢は敗れ、散乱した。官兵は宇都宮城を乗取り、薩摩勢が城内に入ったところ、夜に会津勢に攻められ、四方八方から城下へ火をかけられ、焼き討ちにあい、官兵は敗れた。江戸へ飛脚が送られ、援軍に岩倉勢、因幡・土佐・尾張が出発し、続いて諸家が出発した。大垣勢の負傷者は、国元に帰ったが、下諏訪を通つていった。

四月一日の戦闘については不明。四月十六・十七日には小山戦争があり、旧幕府軍が官軍に勝利する。

四月十九日から二十三日には、官軍が、旧幕府軍に占領された宇都宮城の奪還の戦闘があり、官軍が勝利し、敗れた旧幕府軍は、日光に向かった。

(39)

閏四月三日 尾張藩から早打駕籠が高松藩へ来た。杖突峠を下り、上社へ参詣し、守札をもらつて、高島城へ到着。続いて信州の諸大名を残らず廻るとのこと。

閏四月七日 閏四月七日に聞いた話では、京都から守矢宮内、土橋主税の書面があり、大山玄順、飯田森兎は、偽勅使高松殿の館に入り込んでいたという伝聞があった。

守屋宮内殿 神長官守矢美頭。

土橋主税 大祝諏方家政所土橋主税。実盈のことか。

飯田森兎との 飯田武郷(一八二八—一九〇〇)のこと。高島藩士。国学者。東京帝国大学教授。通称彦助、守人。

高松皇太后后局少臣 高松隊の盟主高松実村。

(40)

閏四月七日 京都の土橋常治郎からの早打で、諏訪神社見分のため、神祇官から勅使が下向すると伝えてきた。閏四月十日頃到着するので用意をするようにと宮奉行から沙汰があった。七日に矢島信智、左司郎文吾の三人で出た。

閏四月六日 六日の夜明方、上金子村取付の饅頭屋が焼けた。隣の市三郎の家が火元で二軒焼失した。

閏四月七日 七日夜八時頃、江戸方面から早打駕籠が通る。人足に聞くと、因幡藩からの早打駕籠だといふ。また聞くところでは、宇都宮道中で因幡、土佐、尾張藩が浪人者と二戦を交えた。そのため、高島藩主にも奥州へ出張するように依頼があった。小口七兵衛という者、江戸から町人となって向かった。

土橋常治郎 土橋主税のことか。

拙著 九頭弁太夫、上社神楽役 矢島信智。

左司郎 右近太夫、上社神楽役 矢崎新造のことか。

文吾 左近太夫、上社神楽役 矢島信長。

(41)

越後高田藩へ浪人が集結。柏崎・出雲崎から今町へ上り、高田荒井宿へ六百人ほどが集まる。飯山から三里ほどの場所なので、富倉峠まで飯山藩兵が繰り出したが、高田藩主から退却を要請された。会津藩兵以外に、関東歩兵もいたようだ。

このことは、閏四月二十日のこと。

閏四月二十二日 浪士の頭領である内田庄蔵、古屋作左衛門のうち、作左衛門は荒井宿へ引き返した。

閏四月二十五日 飯山城に浪士たちが攻め込んだので、朝八時頃から発砲があった。尾張、松代、伊勢藩兵が浪士たちを敗走させたが、浪士たちは逃げながら放火した。

この戦闘は、飯山戦争と言われている。

富倉峠 飯山市市街地の北西にある峠。越後高田平野から信濃の飯山盆地に入る旧飯山街道にある。

浪士頭分内田庄蔵 不明

古屋作左衛門 古屋佐久左衛門。幕府歩兵頭。衝鋒隊隊長。

安田之渡し場 中野市方面から飯山方面に出る渡し場。「綱取の渡し」ともいう。

(42)

閏四月二十六日 松代城主は、二十六日朝に出馬し、まず綿内村に陣所を構えた。

綿打村 長野市若穂綿内

(43)

閏四月二十六日 二十六日朝に、飯山城下へ行き、軍主掛兼へ尋ね、両角新右衛門という人に挨拶をして、様子を聞き、記した。

両角新右衛門 不明。

(44)

閏四月二十六日 二十六日に飯山城下に入ったのは、松代藩 須坂藩 田野口藩 岩村田藩 諏訪高島藩 本曾代官山村甚兵衛、尾張藩 尾張藩兵は松代藩の隊長河原左京が指図して城 下に入り、松代藩兵は野尻宿を関川まで固め、高松、山村甚兵衛が松本荏屋原宿を固めた。

田口様 田野口藩。竜岡藩ともいう。佐久市田口にあった。本領は二河奥殿藩(愛知県岡崎市奥殿町)

()にあったが、信州田野口にも所領があり、幕末に八代藩主 松平乗謨(大給恒 一八三九—一九一〇)に佐久に藩庁を移転した。

本曾 山村甚兵衛様 本曾代官山村良醇(一八〇四—一八八三)のことか。

加賀海道野尻宿 加賀街道は、北国街道のことと考えられる。追分宿(軽井沢町)から高田宿(新潟県上越市)に到る街道。野尻宿は長野県信濃町にあった宿場。

関川 新潟県妙高市にあった宿場。野尻宿の次の宿場である。

松本在荏屋原宿 善光寺西街道にあった宿場。松本市刈谷原町。

(45) 高田城主榊原氏に掛け合うが、浪士が集結しているので、信州諸大名が、高田征伐に残らず発向し、高田から二里手前の宿から段々陣取った。江戸からは岩倉名代が参着し、閏四月七・八日頃掛け合う。

(46) 閏四月十七日 江戸三兵という組が、閏四月十七日までに、甲州街道八王子宿に來た。高島藩のものたちは、荷物が奪われないように、刀や荷札を隠し、漸く逃げてきた。

甲州道中八王寺宿 甲州街道の宿場
江戸三兵 不明

棕料 (さしりよう) 採探(さいりやく)
當藩柿沢岩吉 柿澤藩左衛門正次が
江戸三兵 不明

千人同心 八王子千人同心のこと。江戸幕府が武蔵国八王子周辺に土着させた郷士。

(47) 閏四月二十日 二十日昼頃、柿沢岩吉が殿様へ報告し、敵兵は三坂峠、郡内白野、大菩薩峠、鵜沢口、三坂峠、御坂峠。山梨県南都留郡富士河口湖町と、笛吹市御坂町間にある峠。
郡内白野 山梨県大月市笹子町白野。
大菩薩峠 山梨県甲州市塩山上萩原と北都留郡小菅村の境界にある峠。
鵜沢口 甲府盆地から富士川が流れ出る場所。現在の南巨摩郡富士川町鵜沢一帯。
黒駒 笛吹市御坂町上下黒駒
林庄之助 不明。

(48) 閏四月二十日 二十一日に命ぜられて、高島藩兵が出陣の用意をした。
閏四月二十三日 二十三日に高島藩兵は出発。人数は二百人程。大将は千野孫九郎。
閏四月二十二・二十三日 二十二日に物頭久保嶋郷藏が三十五人ほどで出発し、茅野へ泊まる。二十三日は金沢宿へ泊まる。

閏四月二十日 二十一日晩、尾張藩兵五百人が金沢宿に泊まる。
閏四月二十日 下諏訪宿に飯田藩兵五百人が泊まる。早打が往復し、金沢宿から五・六度来る。
久保嶋郷藏 久保嶋郷藏久将(一八七〇)。四月二十日に甲府警衛で出張。六月十一日帰陣。
茅野村 茅野市宮川茅野

(49) 閏四月二十三日 二十三日、塩尻に泊まっていた尾張藩兵が、朝から午後一時まで甲府へ通る。午後四時頃、甲州から早打が来る。続いて、尾張藩兵三・四十人ほどが高島城下へ通る。午後八時頃、提灯を持って尾張勢が通る。これは金沢宿へ泊まらなかったため、高島城下へ向かった。雨が降ってきた。

塩尻 塩尻市塩尻町

(50) 閏四月二十五日 二十五日昼頃、早打が高島城下へ向かって通る。
閏四月二十四日 二十四日、高島藩兵が金沢宿から台ヶ原宿へ移動した。
閏四月二十六日 二十六日朝、松代藩兵が甲府へ向かって通った。甲州から早打が来る。昼頃にもあった。尾張藩兵が金沢宿へ続々向かった。

閏四月二十六日 甲府城番沼津様へ関東方から京都へ頼むことがあり、往來を許可して欲しいとの依頼があった。城番から京都へ伺いの上通すと、留置し、二十七日までに回答の約束をする。
閏四月二十七日 福井藩、尾張藩、飯田藩、高島藩、松代藩、松本藩は甲府手前の葺崎を先頭に滞陣。塩尻まで二十七日に掛合が済んだ。

閏四月二十八日 六・七度諏訪城下まで飛脚が通る。これは下諏訪宿の尾張藩家老鳴瀬隼人正への飛脚。
閏四月二十七日 二十七日昼頃、尾張藩兵が通り、中に挟んで松本藩兵が通る。午後四時頃まで通る。
閏四月二十八日 京都から保太郎が帰国。保太郎は、尾張藩家老 元千代が出陣と伝えた。中山道木曾街道大久手宿に二万人の軍勢が逗留しているとのこと。二十八日に塩尻宿に先触れが来る。

甲府御城番沼津様 十五代藩主 水野忠敬(一八五二—一九〇七)
越前福井勢 十六代藩主 松平慶永(春嶽 一八二九—一八九〇)。
尾州御家老鳴瀬隼人正殿 第九代尾張藩附家老、犬山城主。当時は成瀬正肥(一八三六—一九〇三)。
保太郎 不明。

尾州若殿元千代様 尾張徳川家第十六代藩主 徳川義直(一八五八—一八七五)
中山道木曾海道大久手宿 大湫宿。岐阜県瑞浪市にあった中山道の四十七番目の宿場。
(51) 五月三日 五月三日まで、毎日甲府から元千代の本陣までか、早打昼夜三回つづつ往復した。聞くところによると、関東勢林庄之助は、尾張藩と沼津藩で召し捕り、沼津藩預かりとなった。越後から大砲、丸薬の依頼があり、二十八日に歩人が届けに行った。越後では戦闘があり、官軍が越後高田に五十人派遣された。このことは、二十八・九日頃聞いた。

(52) 五月四日 五月四日に飛脚が三回往來した。五日には甲府から一度来た。四日朝午前九時頃、鍋島藩兵二十人ほどが甲州方面へ通る。
五月四日 四日から雨が降り、五日昼午後一時頃から晴れる。洪水となった。
鍋嶋様 佐賀藩(鍋島藩・肥前藩とも)。十一代藩主 鍋島直天(一八四六—一九二二)。

(53) 五月七日 五月七日までに、飛脚が昼夜二・四回つづつ往復した。いずれも尾張藩であった。他に松本、飯田、松代、諏訪、鍋島関係の早打もあった。
(54) 五月八日 閏四月二十三日から五月九日までの天気は、二百ほど晴れの日があったが、日々大雨だった。七日から大雨となり、暮には洪水となり、八日朝は雨が小降りとなり水が引いた。正午頃から大雨となり、晴れとなる。丁田ふき前土手半分が崩れ、飯島から役人が人足を引き連れ、対処に当たった。江川橋近辺

のかれ橋が落ち、橋詰が大崩となる。安国寺橋下も切れる。神戸中島も切れ、桑原下から小和田辺りまで何十ヶ所となく切り口ができる。捨水路から飯島尻まで、田部村上まで一円に水没する。午後四時過ぎから午前〇時まで大風が吹く。雨は小雨となる。

五月九日 九日朝、少々降るが、晴れる。

丁田 茅野市ちの丁田

飯嶋 諏訪市四賀飯島

江川橋 茅野市ちの上原と茅野市宮川新井を結ぶ上川に架かる橋

安国寺橋 茅野市宮川安国寺と中河原の間の宮川に架かる橋か。

神戸 諏訪市四賀神戸

桑原 諏訪市四賀桑原

小和田 諏訪市小和田

田部 諏訪市湖南田辺

(55)

五月九日 午後八時頃、早飛脚駕籠が甲州から来る。

(56)

五月十日 早駕籠が二度通る。松代藩兵十五・六十人が甲州へ向かい、尾張藩兵六百人は、甲府から江戸へ向かう。

(57)

洪水の最盛時には水深二m近くまでであった。

(58)

聞いたところによると、会津は国内を厳しく固め、侍が甲中を往来し、口々に戦地の用意をし、落とし穴を多数掘っているとのことである。大宮から会津へ行っていた万屋の倅が戻ってきた。話を聞いたことなので確かである。また、会津は「庭敵之命」を御免になったという。これは五月十日に承った。

(59)

五月十二日 十二日の夜明けから激しく降り、昼十時頃までには洪水となった。組頭田前へ囲いに出る。

(60)

五月十三日 十二日から十三日朝まで、土手で夜を明かす。十三日には大分水が引いた。午前八時頃からまた大降りの雨となる。茅野橋下が切れ、横内へ流れ出て、村中を関中嶋まで押し流した。小江川土手も所々切れる。夕午後二時頃に小降りとなり水が引き始める。江川橋、神戸橋、堂師橋、車橋など、橋が残らず落ちた。

横内 茅野市ちの横内

小江川 小江川は、葛井神社近辺から上川に注ぐ堰。

(61)

五月十四日 十四日朝八時頃、丁田土手が切れる。小雨が一日降る。夕午後四時から少々晴れる。横内、八ツ手新田の人が、川に流れて亡くなる。午後一時頃早駕籠四挺通る。甲府から半時後に二挺来る。いずれも尾張藩関係である。

五月十五日 早駕籠が三・四回往復。すべて尾張藩関係だった。

八ツ手新田 諏訪郡原村八ツ手

(62)

五月十五日 江川橋詰飯田前の土手が切れ、三ヶ所水溜まりとなる。夕暮れまで雨降。大風が吹き、暮方には西風となり、晴れる。

(63)

五月十八日 昼頃から雨が降り出し、夕午後四時頃から大雨となる。

五月十九日 朝までに大洪水となる。朝八時頃、丁田上取翻分の土手が切れ、江川下、赤田土手、下古川神戸村の土手、横内村の土手が切れる。横内村は村中御騒ぎとなり、土手の補修をしたが、崩れて水が押し出した。小江川土手も切れた。

(64)

五月十九日 宮川土手が宮川大橋下で切れる。横内へ水が広がり、上原の関中島、九頭弁平近辺までも水が広がる。大熊の下は、神宮寺村より下、福島、小川にも広がる。八ヶ岳山麓方面の沢は押し出し、農地などは大変に荒れた。当日の夜、午後十時頃まで雨が降り続いた。夜通し、松明、提灯を付け、天に映る程であった。

沖田浦 諏訪市沖田

新井村 茅野市宮川新井

大熊 諏訪市湖南大熊

神宮寺村宮之脇湯尻

福島 諏訪市中洲福島

出文 諏訪市豊田文出

小川 諏訪市豊田小川

山浦 八ヶ岳山麓

(65)

五月十八日 尾張犬山城鳴瀬隼人正の軍勢が、甲府から撤退し、十七日に諏訪地方を通った。

五月二十日 大山勢がまた諏訪を通過した。諏訪、高遠、松本勢は、徳川家達の警備のために来た。諏訪の大砲隊は、甲府で柳原の宮の警備のために、表番を命ぜられた。場所は、一連寺であった。水野は甲府城代を免除され、後は真田が城代となった。

五月二十日 五月の水害は、高遠、飯田、尾張、松本から越後まで大荒れた。甲州は少し軽かったが、前代未聞の事だった。高島藩は、三万石の損害だった。

駿河之駿府 徳川宗家を継いだ徳川家達が、五月二十四日に駿河国府中七十万石の藩主となり、駿河へ移ったことをいつているが、本史料では二十日には、高島藩兵等が、警備で駿河へ向かったとなっている。

甲府一連寺 一蓮寺。山梨県甲府市太田。

(66)

五月二十日 十九・二十日に横内村へ上原村から見舞いとして、水防人足を出払いで送った。神戸村は頼重院沢奥、御嶽山宮の山が崩れた。

頼重院 諏訪市四賀神戸にある寺院。

(67)

五月二十日 美濃加納勢が甲府から撤退し、諏訪を通過する。

五月二十日 雨が降り始めて三十二日目で晴れた。横内、上原の被害状況

美濃之加納様 美濃加納藩(岐阜市加納)。六代藩主 永井尚服(一八三四—一八八五)

真茅野村 諏訪市湖南北南真茅野。

(68)

五月十五日 上野戦争が起る。

江戸東叡山寛永寺に、旧幕府軍の彰義隊が籠もり、官軍と対峙していた。官軍は、降伏の勅命を彰義隊に伝えていたが、これを無視し、五月十五日に早朝から戦闘となった。先陣は津藩 藤堂家で、諸家がこれに続いた。攻撃の状況は、まず、上野下町に火を掛け、江戸口の橋々々を官軍が外し、焼き討ちのように攻めた。遠藤家(藤堂家のことか)は、官軍を裏切り、彰義隊に付き、後ろ向きに発砲した。官軍は、藤堂が上野へ打ち掛かり、上野方へ駆け込んだ。三日に及ぶ戦闘だった。彰義隊の戦死者は四・五十人、藤堂は二百五十人ばかり、官軍は三十人ばかりだった。

ここでの記述は、事実とはかなり異なっているようだ。上野戦争は、五月十五日の未明に始まり、午後一時頃までには終了した。この戦闘に津藩は参加していたが、主力ではなかったようである。記述でわかりづらいが、遠藤家が藤堂家かわからないが、官軍を裏切つて彰義隊に付いた藩は確認できない。

東叡山 上野寛永寺のこと。

藤堂 藤堂のことか。津藩 十一代藩主 藤堂高猷(一八二一—一八九五)。

(69)

五月二十二日 二十一日晩、越後に出陣している諏訪勢から早打ちがあり、兵糧が枯渇してきたとの連絡あり。豆や米を煎つたものを荷駄にして越後へ送った。旧幕軍は上野東叡山を追い払われ、十六日に輪王寺宮の供として何方と落ちた。高島藩主にも、江戸屋敷留守居から、沙汰があった。

(70)

五月二十七日 二十七日に東叡山の落武者三千人程が甲州街道へ集まり、二十八日に聞いた所では、黒野田まで来ているとのこと。柳原殿から高島藩へ、甲府への増員要請があり、派兵した。二十七日昼頃、早打籠籠三挺来る。飛脚が三・四度通る。

五月二十八日 二十八日朝、高島藩兵百人程が甲府へ派遣される。旧幕軍は、東海邊箱根山にも屯集し、沼津城を乗っ取ったと聞いた。

沼津藩が藩内で謹慎待機中の旧幕府方「遊撃隊」に呼応して官軍を裏切つたという風聞が広がり、五月十二日に老臣三浦小平太が急遽京都に召喚された。この風聞が諏訪まで届いたか。

黒ぬた宿 黒野田宿。大月市にあった甲州街道四十番目の宿。

(71)

五月二十九日 甲府警護のため、尾張藩勢、大山勢五百人程が通る。

六月一日 犬山本陣は、塩尻、洗馬に逗留していたが、六月一日に甲府へ向かうために諏訪を通過した。飛脚は今日者通らなかつた。

瀬場宿 洗馬宿。塩尻市洗馬にあった中山道三十一番目の宿場。

(72)

六月一日 美濃国甲木城兵が通過した。毎日尾張勢は通り、五日迄続いた。

(73)

六月四日 四日朝、早籠籠三挺が甲府へ向かった。これは彦根藩勢である。

(74)

六月五日 五日朝八時頃、尾張藩兵八・九十人程が甲府へ向かう。甲府から加藤芳右衛門殿から手紙が来た。飯田氏からの遣わされたもの。彦根藩勢六百人が、塩尻宿から来て、金沢宿に泊まる。

加藤芳右衛門殿 不明。

(75)

六月六日 飢肥城主伊東修理大夫の軍勢が、甲府へ向かうために昼頃通過する。

六月六日 小田原城主、沼津城主は、裏切つて旧幕軍方となり、甲府から夜逃げしたのも、旧幕軍に合流するためだった。新政府から浪人たちに両城を征伐する命令があり、甲府からも次第に小田原、沼津に軍勢を移した。

飢肥城主伊東修理大夫 飢肥藩は現在の宮崎県にあった藩。十三代藩主 伊東祐相(一八二一—一八七四)

小田原之城主 九代藩主 大久保忠礼(一八四二—一八九七)。

(76)

六月八日 八日に高島藩兵は撤退した。しかし、甲州古閑番人として入った者は、未だ帰らず。尾張藩兵は、八・九・十日に撤退。鍋島も同じ。飢肥藩兵は九日に甲府へ向かったが、これも撤退。これらの軍勢が撤退したのは、小田原、沼津が決着したからである。沼津は佐びを入れ、小田原の先陣をし、小田原は降伏した。小田原攻めの大名は、因幡、土佐、越前、高遠の四家である。

甲州古閑番人 山梨県古閑町(旧上九一色村)に口留番所があった。これは、甲斐国と駿河国を結ぶ、中道往還に設けられた番所。

(77)

六月十三日 駿河古閑番に行っていた高島藩兵が、十三日朝八時頃通った。大将は久保嶋郷藏。これで、甲府方面の軍勢は、すべて撤兵した。古閑相代は毛利藩だった。

(78)

六月三日 越後は三・四日に戦闘があった。後に早打が来た。澤市左衛門が大将である。状況は不明。また、十一日に越後へ出発した。

澤市左衛門殿 澤寧。

名古屋海道 不明だが、ルートからいけば、三州街道から秋葉街道か。

富ノ入部 神祇官大鑑察使 富饒夫

高部峠 茅野市宮川高部から伊那市高遠町の間峠。

藤沢 伊那市高遠町藤沢

五官 諏訪上社の神職、五官祝のこと。神長官(守矢氏)、祢豆大夫(守屋氏)、権祝(矢島氏)、擬祝(伊

藤氏)、副祝(長坂氏)のこと。

両奉行 諏訪上社の神職、代々矢島氏と花岡氏が務めた。

大祝屋敷 大祝諏方氏の屋敷。諏訪上社領の役所も兼ねていた。

大上館 太政官、明治政府の最高行政機関。

(79)

六月十五日 名古屋街道から勅使 富ノ入部(富饒天)が、諏訪上社へ到着する。供は若衆一人と侍一人。上社では、高部峠下山之神まで出迎え、小社人も出迎えた。代官は藤沢まで出迎え、五宮祝と両奉行は峠口まで出迎えた。勅使は大祝屋敷まで出迎え、七ツ半頃着座した。大祝からは、大上館(太政官)から命令があり、五宮衆に申し渡された。翌日も参上するように申し渡された。

小社人 大撰末社の神主で、本社の諸役を付加された。

(80)

六月十七日 十七日に勅使が上社本宮へ見分に行く。十六日に、大祝屋敷から高嶺藩へ勅使について報告する。十七日に郡奉行も見分を行う。神職一同、本宮へ詰める。昼頃から夕立となり、午後一時頃、氷が降る。夕午後四時頃から早打駕籠が、城下の方へ通る。

宮田渡屋敷 大祝屋敷に同じ。

郡奉行 江戸時代、各藩において地方(じかた)の行政を担当する役人。領国をいくつかに分けて配下の代官を指揮して民政に当たった。

(81)

六月十九日 宮方一同、本宮へ詰める。勅使から御鉄塔と十二ヶ所を取り壊すように指示があった。高島藩から郡方下役、徒目付、足軽が出張。勅使従者、侍二人も出張。不動堂、薬師堂、護摩堂、両仁王門、釈迦堂、観音堂、鐘堂、普賢堂、五重塔が対象だった。御鉄塔は、神職、雅楽衆、他に小社人が内陣に入り、鉄塔を壊して持ち出した。

御鉄とふ 御鉄塔。廃仏後は、高島藩主諏訪家の菩提寺である温泉寺に移された。
がごふ衆 雅楽衆。諏訪上社の神職の一。

(82)

六月十九日 神社諸堂の取り壊しは、神領人足に命じたが、一切手を付けず、下役、足軽も困り果てていた。六月二十日 郡方二人、下役、足軽、宮衆まで出役し、高島人足、安国寺、新井、田部、大熊、真志野、有賀小坂の六百人余が本宮に詰める。勅使が今日中に取り壊すように命じたが、手を付ける者がおらず、困り果てていた。勅使は下社へ行つたが、勅使役人が一人残ったので、世話をした。暮に人足たちは引き上げた。勅使から郡奉行へ、取り壊さないと言いつつ、因幡守は朝敵であると、京都に報告すると言いつつ渡されたこと。

安国寺村 茅野市宮川安国寺

有賀 諏訪氏豊田有賀

小坂 岡谷市湊

(83)

六月十九日 太政官から、神宮寺、如法院、法花寺(金華寺)、蓮池院の僧侶は還俗を命じられ、侍身分となる。

下社神宮寺、三清寺(三精寺)、勸正寺も同じ。

参考文献

- 諏訪史料叢書刊行會 一九三五 『諏訪史料叢書 卷十二 藩請私集』
- 諏訪史料叢書刊行會 一九三五 『諏訪史料叢書 卷十一 藩請私集(中)』
- 諏訪史料叢書刊行會 一九三五 『諏訪史料叢書 卷十二 藩請私集(下)』
- 大野虎雄 一九六二 『遊撃隊始末記』『沼津史談』一一号 沼津史談會
- 長野県 一九八三 『長野県史 近世史料編 第六卷 中信地方 長野県史刊行會
- 諏訪古文書の会・諏訪近世史編纂委員会 一九八五 『諏訪近世史編纂』
- 長野県 一九八七 『長野県史 通史編 第四卷 近世二』長野県史刊行會
- 長野県 一九八八 『長野県史 通史編 第七卷 近代一』長野県史刊行會
- 諏訪市史編纂委員会 一九八八 『諏訪市史 中巻』諏訪市
- 浅川清栄 一九九五 『高島藩邸と諏訪氏一族』
- 甲府市史編さん委員会 一九九〇 『甲府市史 通史編 第二巻 近代』甲府市役所
- 甲府市史編さん委員会 一九九二 『甲府市史 通史編 第三巻 近世』甲府市役所
- 武井正弘 二〇〇〇 『年内神事次第旧記』茅野市神長官守矢史料館
- 下諏訪町文化財専門委員会 二〇〇三 『改訂 下諏訪町の文化財』下諏訪町教育委員会
- 金子常規 二〇一七 『図解詳説 幕末・戊辰戦争』中公文庫
- 大石学 編 二〇一八 『幕末維新史年表』東京堂出版